昭和戦争文学全集 別巻

南京攻略記

佐々木到一
元陸軍中将・当時第十六師団第三十旅団長として南京攻略に参加

丹陽に至る追撃

転進

石家荘から貨物列車のなかで馬糞の臭気と寒気と脱糞難のために苦しめられた兵員は列車が北京を素通りするので行きさきがかいもく分らなくなった。「満州守備になるので一度凱旋するんだ」「いや山東だ」誰一人行きさきのわかる者はないのが当然だった。

列車が奉天から南行することになって凱旋だというものと、いや中支か南支かだと真剣に考えるものとの二派にわかれた。

大連の滞在二日乃至三日の休養がすっかり将兵を凱旋気分にした。なにしろ二ヵ月ぶりに内地の風呂に入れて貰ったのであるから何よりこれが嬉しかった。その上下にもおかぬ接待ぶりにすっかり有頂天になった、もう凱旋も転進も問題ではない。皆一同子供のようになって喜んだ。

凱旋なんかの想像をするのはなにも知らない兵員だけであった。全般の情況から判断すれば凱旋どころではない、たぶん行きさきは上海にちがいない、上海とすれば派遣軍の後方に上陸して第一線に増加することは万ないであろう。そうすれば杭州湾か揚子江敵前上陸を敢行することになる、しかし行きさきについてはなに一つの暗示さえない。

しかるにここにこまったことにはわが師団には上陸作戦の訓練が出来ていないことである、これは実際ただごとではないのである。運輸部は予に対してさえも行きさきをあきらかにしてくれない。ただ一回だけ柳樹屯付近で艀舟への乗船を演習する機会をあたえてくれただけである。

予はまえの作戦間に消耗した携行品をととのえて静かに上陸作戦のための想を練った。こんどこそ多数の部下を犠牲にしなければ成功は覚束ないだろう、まえの作戦はさいわいにしておおむね追撃戦であったから敵は必ず撤退することが予期された。だからたいして骨はおれていない。だがこんどは？「自分が先頭に立って水のなかに跳り込めばどうにでもなる」これで全軍をひきいていけばよろしい、実際のところ決心はただこれだけだった。

将兵はこのさいすっかりくつろがしてやらねばならぬ、で司令部の下士官兵にも思う存分遊んでこいと言ってやった。

十一月九日、第一真盛丸搭乗。この日旅順に来ておられた植田関東軍司令官はわざわざ副官を派遣して酒を、そのたの知己からも洋酒や食料品の贈物があった。いっさいの秘密がやはりともすればどこからか漏れるのである。

第一船団は五隻、搭乗部隊は師団司令部、予の旅団司令部、歩三三野砲二二のII、工一六のII、師団通信隊等である。午後七時大連港出帆、行きさきは依然として不明。出帆後八時間して開けとの梱包が人を焦慮らせるようにケビンに積み込まれてあるだけだ。

上陸を予期する支那の沿岸がどこであろうともたいがい予は知っている、だからたとえ船中において上陸点を知らされたとてこまりはしない。上陸までの幾日かに必要な予備知識を部下にあたえることは不可能ではないと、やむを得ないながら予はタカを括っている外はなか

った。

乗船後八時間と言えばまだ夜中である、なにも狼狽て知る必要はない、で予はその夜はぐっすり眠ることにしたのである。

明くれば十一月十日、秘められた梱包のなかには揚子江流域の地図と兵要地誌がぎっしりつめこまれているのであった。

「杭州湾ではない、そうすれば揚子江を溯って敵の背後に出るのだ」「面白い、やるぞ」「三年間睨んでおいたあの熟地だ、下手なことはやらないぞ」これが当時の予の心境であった、少しも遅疑するところはなかったのである。

山東岬かどに英国の駆逐艦が頑張っていて我が動静を巨細に注視しているので、輸送船団は朝鮮半島に近く南下しつつあるのを知る。この日終日朝鮮近海を南下。

十一月十一日、朝鮮西南岸より右折して馬鞍列島に向かう。海軍の監督将校と船長の談片からようやく上陸目標の判断ができる。

十一月十二日、馬鞍列島にちかく軍艦〇〇が出迎え誘導、海はすでに黄色ににごり揚子江口に入っていることがわかる。

五日の航海に毎夜徹底的に飲む。同船は歩三三のI野砲IIの五、第一船団の先頭をうけたまわる以上毎夜の食卓に顔をあわせる将校の少なくも半分は殺さねばならぬ。予はそれを意識して志気の高揚につとめたつもりである。

北支作戦第二日、東辛庄の戦闘において中隊長を失った第一中隊は今紅顔の青年少尉によってひきいられている。この少尉にはロマンスがあった。彼は事変前内地で入院中に看護婦との間にできた情事が連隊内の問題になったまま出征しているのである。「なぜそれを認めてやらなかったのか？」「心に残るものをそのまま多感な青年に未解決のまま永久のわかれをさせることは無理ではないだろうか」彼の顔に一抹の寂莫を認めて予は同情の念禁ずるあたわず、つとめて彼の志気を発揚することに留意した。ちなみにこの少尉は無錫攻略戦において胸部を貫通され瀕死の重傷を負ったがさいわいに生命をまっとうしたはずである。

正午呉淞着、松井軍司令官呉淞にきたり我師団にたいし命令をくだす。師団命令にもとづき佐々木支隊は重藤

支隊につづいて上陸しその左方にあって敵の退路を遮断すべしというのであった。

上陸点は白茆口。昭和七年の上海戦における七了口よりも上流である。

「敵の逃げた後に上陸するのはいやだ」

逃げ足のはやい敵がこんな姑息な背後遮断の手に乗るものか。予の放言にたいして師団長はだまっていた。おそらく同意だったと思う。しかし軍の作戦計画に文句の言える身分ではない。ただだまって命令を実行するあるのみ。酒を喰い船室にもぐり込む。

上陸細部の計画は連隊長がすればよろしい。がともかく上陸作戦の第一次命令下達に立会わしたことだけは事実である。

上　陸

佐々木支隊は重藤部隊の左に上陸せよとの命令を受けた。上陸の直接部署はほとんど全部歩三三長野田大佐に関するはずであるから大佐にまかせた。

吾々の部隊が杭州湾上陸軍のための支作戦に任ずるものであることは、当時の予にはわからなかったので、なぜかような小規模の背後遮断をやるのかとの不満が起ったのである。十二日は昏々として酒に暮れた「信頼する野田大佐が万事やってくれる。同期生の重藤少将の率いる台湾軍がまず上陸する、俺はだまって上陸すればよい、さすれば大きな犠牲を払う必要はない」これが安心のたねだった。

十一月十三日、未明船は白茆口沖に投描した。

軽巡洋艦がさかんに陸岸を撃っている。下駄履きの海軍偵察機が飛翔する。やや遠く右前の江岸に煙幕が展張され発動艇が蝗のごとく進む。江岸に沿うた部落には諸所火災がおこり、黒煙は天に沖してうえにひろがっている。これが友軍上陸の光景である。

予は船長とともに船橋にのぼって情況を注視した。双眼鏡に映ずるものは壮烈なる友軍の上陸戦闘であって、彼我の銃声はすでに陸上にうつっている、敵前上陸が成功しているのである。

我部隊上陸のための発動艇はまだ一隻も来ない。

午前十時、将校全員ケビンに集合。

引地船長、

「御乗船以来誠にいたらぬ御接待で御座いましたが吾々の赤誠をお汲み取り下さいまし、上陸戦闘をまえにして閣下の部隊の武運長久をお祈りいたします」

「乗船以来船長はじめ船員各位が我隊将兵一同に示された御好意はすなわち我国民を代表した銃後の後援と感じます、これに御答えする道は吾等一同渾身の努力をもって奮闘するのみであります。ありがとう御座いました」

乾盃が行なわれた、北京以来予の行李に秘めていた恩賜の酒である。

緊張のうちにも安易ににたある感情が往来した、我隊の上陸すべき前面にはすでに敵影を見ないかのようであるからだ。

予は全武装をして船橋に上り上陸の期を待った。

午後三時、わずかに三隻の大発動艇が来着した。この揚陸材料では馬も車両もいつ上陸できるかわからない、もっとも友軍重藤部隊の上陸が完了すれば逐次発動艇を回してくれることは察することもできるが、それがいつの頃になるかは一切わからないのであった。

予は第三の発動艇に乗ることに決めた。船長以下船員にわかれをつげた、谷河賄長がとくに酒とチーズをくれた。

第一真盛丸は山下汽船会社の所属であって、その後敵機のため船橋を爆撃され、船長、機関長、無線局長等は即死、事務長、賄長その他に死傷を生じたことを数ヵ月後に聞いたのである。ちなみに谷河賄長はその息子を津浦線の戦闘に失っている。

発動艇は江岸に向って驀進した。敵影なし。

艇は江岸を距る若干（じゃくかん）メートルのところに擱座した。書記が「閣下、お足を濡らされるまでのことはありません」と言うのではなはだ横着のしわざとは思ったが背負って貰って上陸した、老人の役徳とでもいうのだろう。ただし江岸の泥濘で靴も巻脚絆も泥塗れとなった。

無血上陸、部下の半数を殺さねばならぬと観念していた敵前上陸が無血に成功したことはなんとしても重荷のおりた思いである。

暮色蒼然として到る、枯れた蘆や流木をあつめ、焚火して足をかわかし水筒の茶を暖めて夕食。谷河賄長のくれた酒をわかつ。

敵が去るに臨んで放った部落の火災が各所に赤々と天をそめて、竹のはぜる音がかまびすしい。やがて大きな

農廈をもとめて司令部は宿営した。

外套一枚を寝具に木製の穢い寝台に眠る、一本の蠟燭がどす黒く煤けた室内を照らすなかに、予は上陸第一日の日記を記した。兵員の大部は庭に露営。前哨線には銃声もしない、沈々と夜はふけてゆく、犬の鳴き声すらも聞かれない静寂そのものの夜だった。

隣家に赤子が遺棄されていると書記が報告した、人の子一人いない江岸の半農半漁の部落である。あすの日から戦闘を予期する我部隊に赤ん坊の収容も慈悲はたんに当座に止まるのみであることを思い、予は聞かぬこととしたが、さるにても我子を遺棄する無慈悲な支那の母親の心情が腑に落ちぬことである。

安心、熟睡。

水際にきょうを限りと気負いしが
長江の水ただ脚に冷たき

緒戦の勝利

十一月十三日の午後から朝にかけて発動艇を往復させたおかげで歩三三の戦闘部隊全部を揚陸することができた、ただし馬も車両もない、将兵個人は勿論部隊そのものが着のみ着のままである、これで今日から敵にぶっつかるのかと思うといささか心細いが、どうせ逃げる敵だ、頭をぶっつけて喰いさがればどうにかなる、戦はバクチだ、一かバチかやってのける——大胆不敵なこんな決心も敵をのんでかかっていたからである。

前進第一日、未明出発。部落はいたるところ燃えている。敵陣地に艦砲の巨弾の跡がある。百姓の男女が狂気のようになって燃える我家に水をかけている哀れな光景も目に映る。

支塘鎮にいたる軍路があるらしい、それに出るまで江岸に沿うた提防上の道路を行く、人の高さよりも高く生い繁った蘆のなかにおおよそ十歩ごとに各個散兵壕を掘っている、提防の下には掩壕があって今の今まで敵のおったけはいが感じられる。

偵察機が来る、早速布板を出す、応答なし、物たらぬことおびただしい。

行くこと二時間にして幅約二十メートルの軍路に出る、ただ土を積っただけである。

連隊砲兵はここまで人力で牽引してきたので遅れ勝ち

だった、重機関銃もむろん肩にかついでいるのである、旅団長以下全員徒歩。

我支隊（三三のみ）は三縦隊となって前進、上陸点や配属野砲兵大隊並びに歩兵砲隊に援護部隊を残して来たので支隊主力の進路にはわずかに六個中隊余である。ただ粛々として進む。

午後一時張家喬にたっした時、前方に急激なる銃声を聞く、予は支隊本隊（と言ってもたった三中隊）を開進し路傍にある小高い堆土に登って敵情を視察していると、パラパラパラと機銃弾が道路上の土を蹴って飛来した。むろんチェック軽機で狙撃しているのだ。

チェック軽機の射法は普通十発点射であってまず一二発試射的に撃った瞬間パラパラパラとつづいて撃ってくる。「くるぞーッ」と言ったようなざわめきが予の脚もとに伏せている予備隊からおこると同時に予は堆土から跳びおりて土饅頭の後方に蔭蔽したが「俺の狼狽ぶりを兵隊が批評してるのではないだろうか」といういささか羞恥に似た感情が頭脳のなかを通過したが、それもすぐさま忘れてしまった。そんなことは戦場では尋常茶飯事だからである。

第一線（約四中隊）は連隊長が指揮してぐんぐん攻撃している。砲は一門もまだ到着しない。が敵にも大砲はないらしい。

流弾がしきりに頭上高く飛びすぎる、時おり左前の竹籔の方向からチェックが見舞ってくる、少し低くなった畑の中に予備隊をふせていたがやはりなにかが敵方から見えるらしい。

将兵はこんなことにはとくになれていてむしろ無感覚にひとしいのである。鼻歌を唄っているのもいる、すでに七八里の強行軍のために疲れはててグーグー鼾をかいているのもある。

予は銃声によって前面の敵を微弱なものと判断した、「前進第一日の緒戦はおそらく日没前に我の勝利に帰するだろう」

戦闘約三時間、支隊主力前面だけでも二十数名の死傷者が生じたので農家に収容。予は手兵を提げて第一線に向わんとする時、敵が退却を開始したことを知る。

患者収容所に若干の護衛兵を残しそのまま追撃前進にうつる。

この日道にまよった台湾軍の兵数名を収容、途中敵線

にぶっつかったらしく戦死者が残してあると言った、かなり志気が沮喪しているらしく弱気なことを言っているので叱りつけておいた。時と場合によっては日本兵でも弱いことがあるのはまぬがれないものである。

嚇々の勝利ではないがかくして緒戦には容易く勝ったので幸先がいい、このまま一と押しすればあるいは逃げおくれた敵の退路に殺到することができるかも知れない。

全軍の志気大いに振う。

小雨と暗黒と。

冷気あれど急行軍のため身体汗ばむ。

夜間追撃

半日の力攻によって敵の収容陣地を一蹴した予が部隊はそのまま夜間追撃にうつった。支塘鎮にいたる軍路を進む部隊のほか左右両縦隊の情況はいっさい不明であったがただ遮二無二敵中に突進した。

相変らず沿道の部落は次々とむこうへ焼けて行く。そして敗残兵の姿が火災を背景としてくっきりと浮き出るのである。

追撃隊はどこまでも敵に尾して急進する。いつの間にか司令部とは連絡がたたれてしまった。

泥濘の軍路の一側に追撃隊の足あとによって踏み固められた一条の小径をたどって、ときおり足もとの悪いところを懐中電灯を照らしながらそれでもかなり急速の歩度をもって追及していた。

電灯の光に照らし出される路側の溝の中にはその都度多数の敵屍がころがっているのが見られた。鼻の下まで水につかりながら半眼を開いているずるい奴もいた。無論とどめの一発を喰わねばすまないてあいであった。

「中国(チョンゴウ)」「中国(チョンゴウ)」と連呼しながら友軍をもとめて本道に逍遙い出る敗残兵が、電灯を指しむけられて「呀喲(アイヨー)」と叫び踵をまわして逃げるのを撃つ、畑の畦を跳びこえてそしてついにころがるまでに一分とはかからない。銃弾を受けて立ちながらくるりと一回転して倒れるのもあり、即死を装うずるい奴もあり、また時に所々に遺棄された敵の傷者の唸き声さえ聞かれた。

無数のクリークが退路を阻んでいるからには、逃げ遅れた敵はいやでも本道を目指して出て来なければならな

かった。そしてその都度射撃の的となったのである。
滑稽にもまた悲惨なこの競射がかえって次第に敵愾心に燃えていた我兵員の神経をおちつけたかのようであったが、赤々と燃え熾る火災の外、咫尺をも弁ぜぬ暗黒のなかを黙々として進む一隊には戦場の凄気を感ぜしめるに十分であった。この競射の一瞬以外誰一人言葉をはっする者はないのである。
不意に右前方近距離の暗闇の部落からチェック機銃が撃ってくる、一隊はそのまま道路の一側に伏姿をして敵情を窺った。さかんに撃ってくる弾丸はチュッチュッと頭上極めて近くをかすめている。
「分隊長がやられたらしいです」
躊躇は禁物だ。
「右から部隊を回せ！」
副官がこそこそと這って命令をつたえに行く。機銃の合間合間に小銃も撃ってくるがたいしたものではないらしい。多分味方の退却を知らないでいるのだろう。
だが弾丸は現実に頭のうえをさかんに飛んでいる。あるべき地物はなく敵に胴体を見せて伏せているばかりである。
息づまるいっこく、迂回部隊が部落のいっ端に取り付いて藁ぐろに放火した。
「ソレ、突撃！」
狼狽して逃げる敵、歯牙にもかからぬ微弱な敵ではあったがやはりこれほどの手数をかけなければ追っ払うことは出来ないのである。
敵にいっこくの猶予をも与えぬ急追であったお陰で多数の橋梁は今火をつけたばかりのものを消すのに造作がなかった。これが焼け落されたとなれば少なくも砲車車両のためには修理に相当な時間をようしたはずである。
追撃約六時間、目指す支塘鎮への図上距離はとっくに過ぎている。くわうるに小雨が降ってきた。道路上に縦隊のまま無数の塹壕を利用して天幕露営をする。
冷え切った飯盒の飯がとても美味しい。
かなり大きなクリークをへだてた対岸の大きな農廈が焼けている。屋根が焼けて落ちる、柱だけが立ち残ってさかんに燃える。真っ黒によどんだクリークの水面が光っている。手榴弾がさかんにはぜる、そして羊の鳴き声がものすごい火災の音にまじって哀れ気に聞こえる。断末魔の訴えのごとくに。

私はしばらくは放心したように対岸の光景に見惚れていた。

小雨はしだいに降りつのってきた、風さえ加わって塹壕のうえにはられた天幕のうえに音を立てて打ちつける。ひとしきりガヤガヤやっていた兵隊達の天幕には鼾声のほか物音一つなくなっている。遠く近く銃声、犬の鳴き声も聞かれぬ、夜気沈々、戦野はいっさい静寂に帰した。疲れたからだを藁のうえに横たえてすぐに熟睡。

燃え熾る農家の火の手先兵の
息もつがせず追い迫る見ゆ

ごうごうと闇にタンクの音聞ゆ友軍ぞ
敵の退路に迫りつつあるわれ

敵中を楔状深く突破すれば
戸惑える敵アイヨとて逃ぐ

常熟への前進

昨日の戦闘以来掌裡を脱していた部隊を集結するのにおおよそ半日を要した。そのうえ地図とちがっている道路をもとめて支塘鎮にでるのに相当の苦心をした。

正午すぎ暖い飯盒の飯を食い終わって前進につかんとする頃一隊の軽装甲車が前進してきた。この軽装甲車中隊は約十台のうえに鹵獲した一両のバスを持っていて、中隊長が親切にも歩兵を便乗させてはと勧めるのであった。もっとも予自身が同行しよう等とは考えもしなかったらしい。この将校の言によって、昨夜の息もつかせぬ急追が敵をまったく混乱状態におとしいれ、上海方面より退却する敵の後衛部隊約三千はその横腹をつかれて、支離滅裂、装甲車隊がこれに追いすがって徹底的の打撃を与えたという愉快極まる情況を知った。

前方にはすでに第十一師団の部隊が進出しているらしい（これは後に事実でないことがわかった）とのことで予は装甲車隊に工兵を付して先行させ、橋梁の補強をさせることが必要だと考えた。ついでに乗馬を残してきている予もこれに便乗して先行することにした。

中隊長は敗残兵――といっても部隊をなしているものがいることも想像される――の狙撃をかなり心配してい

た。それで予に装甲車に乗ってくれと言う。で一度は乗って見た。しかしたくさんの装具をつけている予はこの狭い車のなかに身動きも出来ないでちぢこまっていられそうにないのですぐに飛出してバスに乗った。広々としたバスに副官と書記と三名の歩兵と約一分隊の工兵とが乗った。

部隊は野田大佐に引率を命じ、威風堂々と前進を起こした。

道路両側の部落のあいだを三々五々西へ西へと急ぐ便衣の支那人がおびただしく見える、じつに無数の敗残兵である。がこんなものにかまっている時期でない、先方から撃ってこぬかぎり皆目こぼしである。やがて第一の橋梁にたっした。予想通り焼かれて戦車は通れない。無論すぐに工兵の職場である。電柱を切る、扉をはずしてくる、たちまちのうちに修理が完成する。この作業の間、歩兵は警戒に任じた。付近の農家を物色する。すると必ず便衣の敗残兵が潜伏していた。たいていは一時呆然として降伏もしなければ抵抗もしないものである。しかし問答や憐憫はこの場合絶対に禁物である。とっさの間に銃剣か弾丸がすべてを解決する。

どこからか銃弾が飛んでくる、車外に立っている予の足下の土を蹴る、パシーッと車体にあたる、装甲車を小楯に畑のなかを物色すると、青い蔬菜畑のなかをそれらしい黒い影が逃げて行く、狙撃、当たらぬ、又射撃、当たらぬ、もどかしい程狙撃が拙である。

将校マントをきた奴が三四名、小舟でクリークを逃げる、好目標御座んなれ、三名の射手が道路上に膝射をもって競射、命中、水中にひっくり返るのが見える。

こんなことを言っていると空気銃の団磨おとしのような感がするかも知れないが、ただこちらに心のゆとりが十分にあるだけで敵がどこから狙撃してくるか実はわからない戦場であることは言うまでもないのである。

かくて数個の橋梁を補修しつつそのつど敗残兵狩りをやって前進をつづけた。沿道には例によって敵の死屍が点々と散らかって無数の装具が捨てられていたが特に馬頭鎮の惨状は特筆の価値があった。ここには敵の後衛砲兵が布陣していたとみえて陣地についた砲車が偽装したまま捨てられその下に二三の死屍が血に泥とに塗れて長くなっていた。家屋の後方には蓋をひらいて弾薬をとり出した弾薬車が四つ整然と置かれていた。橋のたもとに

は繋駕したままの砲車が人馬もろとも横たおしになっていい、馬の横腹や兵の頭が柘榴のように打ち割られ血が黒くなって凝固していた。一つの砲車は橋の欄干をこわしてなかば橋路面の外におちかかっていた。敵は残る兵器を水に投じて逃れたものと思われる。そして橋梁は今もなおブスブスと燃えつつあるのである。部落も燃えている。路側には爆弾の漏斗孔が空爆の成果を如実に物語るがごとく点々と存していた。ここに戦敗者のみじめさをまざまざと見せているのである。

常熟前面の設備陣地にはすでに台湾の歩兵連隊の一部がかかっていた。予は該正面が当然吾々の師団の戦闘正面であるべきのゆえをもってそれをゆずられたき旨を申し入れたが、大隊長は命令であると称し頑として肯かなかった。やが、我部隊は夕刻頃にいたって到着したけれど正面にはすでに戦闘加入の余地がなく、やむなくその左翼後に集結を命じたのである。

先に進出していると思われていた第十一師団の歩兵が我支隊におくれて到着した。かくてこの正面には系統をことにする三個の歩兵部隊が進出しているのであった。

第十一師団の歩兵部隊はその配属された軽装甲車一台が昨夜敵陣地の直前まで驀進して対戦車砲のために進退の自由を失っている。しかも車の中には生存者がいるらしいとのことを知ってこれはぜひとも自己の隊の力をもって救い出す義務があるといって戦線の交代を要求した。それも無論理由があるのである。

かかる交渉が行なわるる間は攻撃が所期のごとく進捗するはずはなかったがあたかもよしその翌日軍参謀先行しきたり、当面の攻撃を我隊の担任に移しまた第十一師団の部隊（歩一二）を一時予の指揮に属するよう軍命令をくだすはずとの予告をしてくれた。

攻撃のため敵状地形の偵察がこのためにおくれた。我部隊の攻撃開始は実に敵陣地前到着の第三日にまで遷延されたのである。

第十一師団の部隊（歩一二及び工兵一中）は八月以来上海付近の戦闘に大打撃をこうむり大隊長及び一名の中隊長のほか全部は召集将校であり、兵員もまた高度の損傷に対する補充員にてその行軍の状態を見ても忘気は頗る沮喪していた。連隊長の希望によってこれを第一線正面に出したとはいえ大中隊長はひそかに交代を希望してい

た。もっともこのことは当時第十一師団が他の方面に転進する内命を受けたとの噂があり、したがって当面への深入りを不利としたのにもよることと思われる。前線から連絡に来ている兵の口から漏れる言葉は実に戦闘の悲惨を誇張するかと思われる不快なる談片のみであった。

同夜暗に乗じて後退して来た装甲車の隊員二名、いずれも負傷していたが二昼夜の間車内に頑張りとおしていたのである。これをきっかけとして予は第十一師団の部隊を後退して予の部下と交代せしめた。

装甲車は依然として路側にエンコしたまま彼我の中間に横たわっている。

かくして常熟の攻撃が幕を切るのであった。

常熟前面の陣地攻撃

連日小雨のため道路泥濘となり相当悩まされる。

十一月十五日夜にうけた師団命令によれば軍の追撃目標は無錫であって師団主力は福山より無錫に向かって敵を急追し、佐々木支隊は常熟から左追撃隊となって無錫に向えということであった。いづくんぞ計らん常熟前面には数線の縦深陣地があり、トーチカまで設備してあって台湾軍が一日前から引っかかっていて前進が出来ない、暴進した我軽装甲車が三台まで損傷を受けているのである。

この夜呉宅頭としょうする沿道の小部落のきたない民家に舎営をしてとにかく戦線に出るために図上において地形判断をこころみた。

翌十六日は敵状地形の偵察に終日を費したが予は薄暗い民家の土間の焚火にあたたまりながら各方面から来る連絡者を引見して全般状況の認識につとめた。

揚陸材料不足のためことごとく足を取られた、我砲車はやむなく始めは臂力後は水牛に牽かせ、それでもこの夜連隊砲速射砲が追及してきてくれたのはありがたかった。

軍参謀二神少佐が先行して来る、内山少将の軽榴弾砲がまず来着する、そしてその隷下の攻城重砲各隊連絡者がぞくぞくやってくる、この一本道路に機械化砲兵がこんなにつめかけてきては行李輜重の行動はさぞかし妨害されるだろうと考えたりした。

午後九時頃歩十二のⅡ、工十一のⅡ、軽装甲車第八中

隊を配属された。

山砲兵第十一連隊、戦車大隊、重藤支隊等の連絡者が来る。

かくして情況が少しずつ明瞭してくる、とにかく我支隊は当然当面の花形役者としてこの戦場に登場しなくてはならないのである。

張家喬にのこした傷者は衛生隊の上陸がおくれ後送の見込み立たぬことを察してべつに歩兵一小隊を派遣して収容させることとした。土民の不逞行為に対しても実は案ぜられていたからでもある。現に道に迷った台湾軍の山砲兵や衛生兵が土民から危害を受けているのである、この付近の民気は実に悪い。

十一月十七日午前四時にいたり師団の攻撃命令を受領、これより先我支隊はすでに攻撃配置についていたので直に前進を命ずるはずであったが前面の敵状なおいまだ明らかならずよって前進を今薄暮より開始することとした。

予は爾後の機動を顧慮して民船の収集を命じた。

支隊にあらたに配属せられた野重十一及び同十二のⅡの先頭到着したるも、内山旅団の十加大隊及び十五加の二個大隊が道路の一側に陣地進入をして常熟城及びその付近に対し砲撃を開始しているので、これを超越することが出来ない。加えて山砲兵第十一連隊も直接支隊の戦闘に協力することとなり常熟の攻撃は我支隊の独壇場となった観がある。

この日は概して終日を砲撃に暮らしたが、敵陣地内細部の状況については依然として不明であった。したがって敵の前進陣地の拠点を一つ一つ破壊していくほかはない。

十一月十八日払暁より第一線（歩三三）は攻撃を開始し連隊砲を進めて敵のトーチカまたは掩蓋銃座に対し破壊射撃をくわえた、この前進間敵前に遺棄した装甲車より傷者二名の救出に成功した。

軍参謀北島中佐連絡のため来り敵中央将領会議が蘇州において行なわれ、ただちに退却而して無錫の線は抵抗の意志はなきもののごとしとの通報があった。かかる推断が通常当らざりしことは後に事実の証明するところであって、上海付近の陣地攻略後派遣軍首脳部は一般に敵状を軽視し部隊に対してかなり無理を要求した感がある。

この日日没より夜半にかけトーチカ八個を攻略したが敵は後方のトーチカ陣地を保持して頑強に抵抗し、全陣地の攻略はまだ見込みが立たぬ。

本日収集し得たる民船約百五十隻あり、その大部を師団に提供し、支隊は追撃用としてその二十隻を第一線の後方にて待機せしめた。

この夜師団は左翼に水上迂回隊（歩二〇）を派遣し主力をもって追撃を準備しつつ攻撃を続行すべき命令をくだす、歩三三長野田大佐は力攻をもってすみやかに敵陣地を奪取すべきものと解し相当の無理をも仕かねまじきものと見えたので予はいたずらに損害を増加することを慮りただちにその誤解をといた。

十一月十九日、小雨は依然として降りつづいている。前日までにおおむね前進陣地を奪取したが諸所にトーチカが残存し斜射側射を受ける部分もあり相当困難なる陣内戦を経験した。

この日第十一師団部隊の配属を解除された。

泥濘の悪路を第一線連隊本部にいたる。途中にいたるやや小高い橋梁のうえは銃弾がさかんに飛来して補強工事に任ずる我工兵が見るまに死傷する。第一線は連隊砲を敵主陣地前四百メートルに推進し、重機を屋上にあげてトーチカの銃眼をはさみ撃ちに狙撃させていた（敵の掩蓋銃座は仰射がきかぬらしいので屋根の上に重機を引きあげて拝み撃ちするの有利なことを発見した、はたして敵の応射は屋上に達しない）。敵もひるまず応射、連隊長から情況を聴取している瞬間敵の機銃弾が外壁を打ち抜いてむかい側の壁にピシリピシリと打ち込んでくる。がともかく二時間あまり敵前約二百メートルの農家に頑張って敵状を視察した。敵もまたはなはだ頑強に抵抗しトーチカ内に死傷者を生ずるとたちまち後方から補充をくり入れるほどの執拗ぶりを示していた。工兵は発煙筒も爆薬も船中にのこして携行していなかった。

この夜勇敢な一上等兵は赤裸の褌一つに銃剣をはさみクリークを渡ってトーチカに近づきその銃眼から手榴弾を打ち込んでこれを奪取した。このトーチカは前日来もっとも頑強に抵抗を持続したもので後にいたりそとから鍵をおろして逃走を防いでいたのを発見し、かねての情報が必ずしも偽でないことを知った。

敵の銃火をおかして作業した我工兵の努力によって本日橋梁が重車両の通過を許す程度に補強された。

本日の戦闘に十加、十五加、十五榴及び山砲等みな戦闘に協力してくれたが実際の効果はあまり大ではなかった。

夕刻師団参謀長きたり右翼に隣接する重藤支隊は虞山を占領し常熟城内の掃蕩を開始せるをもって第十六師団の正面も攻撃をいそぐべしとのはなはだ奇怪なる通報をもたらした。これは後に至り誤りなることが判明した。しかし予は各方面敵の陣地の強度に差異がある以上マラソン競争なんかいっさいしないことに心中決心していたのである。

左翼に出した三浦大隊（二中隊欠）が援兵を請うことを暗示するような報告をしたので無電で叱ってやる。

間断なき本日の猛攻によっておそらく今夜中に敵の本陣地を奪取し得るとの予の予感にもとずき歩三八を招致し水路によって敵の退路を遮断すべき部署を命じた。

十一月二十日、敵は陣地を撤退、歩三三はただちに追撃にうつり、常熟南方に進出して敗敵を掃射す。歩三八は所命の時刻に到着せず出発おくれついに敵の退路を遮断するあたわず、むなしく三三の後方に続行してそのまま追撃にうつる。

かくて常熟の陣地攻撃は十七日の砲撃開始にはじまり十八、十九両日歩兵の力攻により二十日の払暁にいたってようやく攻撃奏効を見たるわけにて、重砲の破壊射撃は実際上ほとんど形而下の効果なきを発見、歩兵はその自己の装備をもって敵を力攻する外陣地奪取の最後の決を庶幾し得ないことが明瞭となったわけである。

この戦闘に歩三三は少なからぬ死傷を生じた。一戦ごとに有為の青年将校以下を失うことは痛心の極みである。

十九日の夜クリークの水面に蓄音機のレコードとハーモニカの音を聞いた。風流とか余裕があるとか言えば言えるかも知れないが、鱗次形に設置されたトーチカの攻略に苦心惨胆している歩兵の労苦を他所にいわゆる貴族兵種が夜間を休養顔に浮かれおることは義憤のたねであった。

次級副官は徴発した民船の搭載量を計算することが出来ないので二十隻の民船の搭載区分に関する命令がだせない、その上旅団司令部用として控置すべきものを連隊に取られるようなヘマをやっている。

クリークを泳ぐ裸形のつわ者は肉弾をもってトーチカ

を抜く。

無錫への追撃

十一月二十日、払暁わが第一線は敵の退却に尾し、破壊された橋梁に応急修理を加えあるいは民船を利用して渡河し、勇猛果敢常熟城の南端に進出して敗走する敵を掃射することに努めた。

これより先、予は追撃を予期し、その前日の夕福山県の攻撃を中止して旅団に追及した歩三八をちかく第一線に招致し、これを水路によって常熟南方に進出せしめて敵の退路を遮断せんことを企図し、これに関する命令を送付したが、のちに至って命令受領の下士官が師団命令の下達を待ちこれと共に持ち帰ったことがわかった（宿営に就いた直後前進命令をうけたのを連隊書記が握りつぶしていたのが後に判明した）、これが為ついに戦機を逸して正午までに来るべき部隊ついに来らず、ようやく午前四時に至りこの部隊を搭載した民船を出発せしむることができた。

予もまたこの船団とともに前進するつもりでいたところ該隊は旅団司令部用の大型民船を無断使用した結果、予は不覚にも予備隊いっさいを失い、陸路を歩三三に追及するのやむなきに至ったのである。

当日師団の部署は、草場少将の指揮する歩一九旅団ならびに重軽砲の大部をもって編成する部隊を突進隊として先遣し、予の旅団は第二線としてその後方に跟随するはずだったが、草場旅団は本道を離れて前進困難なる水流地帯に分散し、とうてい速かにわが隊より前方に進出することは困難であり、くわうるに破壊せられた橋梁が砲兵の通過を許すまでには相当の時間を要するものと思われた。

予の司令部は午前十一時楊家橋に到着、歩三八はわずかに二中隊が歩三三と共に進出しその後はなお水路輸送中に在ることを知ったので、予は王泥楼において約二時間の休止を命じ、部隊の整頓を行なわんとした。

前日来小雨降りつづき道路泥濘、徒歩行軍は少々重荷だったが馬がないから致し方はない。

昼食に選んだ家は最近まで敵の本部かなにかであったらしく弾薬、白米なぞ散乱していた。

当番兵が焼酒らしいものを見つけてきた。

「苦力に飲ましてみろ」
「飲ませました、大丈夫であります、好々とかなんとかいいました」
この前夜深更、予が追撃部署を命令している時、高級副官は命令を筆記しながら睡りこけて通信紙の上にわけのわからぬみみずを書いてた程に疲労していた、しかしこの疲労はひとり彼副官だけではない。
一瓶の焼酒が鯖の罐詰（この鯖の罐詰は毎日のことで悩まされた）と共にたべる冷たい飯盒の飯をどんなに甘くしてくれたことか、それは酒好きでなくてはわからないだろう。
二時間の休止が野田大佐には不満だったらしい、今わが旅団は師団命令は如何あろうとも事実上追撃部隊の先頭にあるのだった、敵に追尾して何処までも何処までも喰い下がるべき時機だったのであるが、予は三百や五百の敗残兵を問題にしていなかったのである。
相変らず敗残兵が部落の中に潜んでいた、手榴弾が到るところに陰匿してあった、燃える藁の中から盛んにはぜる、危険で寄りつかれない。
夜にはいって練塘鎮に宿営、連隊本部と共に蚕糸工場の大きな作業室に板を敷いて寝床を作る、寝具なし。積極精神の権化のような連隊長は不満をちょっとほのめかした。
「なぜ追撃中に停止を命ぜられたのですか、常熟城内にはまだうようよ敵がいたはずですが……」
「城内は戦車だけで掃蕩を命ぜられた筈だ、……武士の情けだよ」
武士の情けという意味は北支作戦いらい兄弟旅団がまだ花々しい第一線を勤めていないから前方に出るまで待ってやれという意味だった、しかし冷厳に批判すれば二時間の遅滞が戦機を逸することもあり得るということも理屈である。
この日歩二〇の二個中隊がわずかに進出してわが野田連隊と行動を共にし大部の進出はなおはるかに遅れていたので、わが旅団は師団命令では第二線でありながら事実は第一線追撃隊であったのである。
本日の追撃間に遭遇した一つのナンセンスは常熟西門より常熟——無錫道にでる本道への三叉点付近を追撃中、将校マントを被った三名の敵将校がおりからの小雨を冒かし頭巾を真深かに被り前かがみになってわが追撃

隊の方向に出てくるので司令部の兵員が「それッ敗残兵だ」といって四五名立射のままで射撃を始めたが、なかなかあたらない、距離四百メートルばかりだったと思う。そのうち敵の方でも気がついたらしく急に方向を転じたが走るけはいもない、タカを括っているのか泥濘の畑地が走れないのかとにかく憎々しいまでに落ちつき払っている。やっと一名をたおした、すると後の二人が急に駈けだして樹林の中に逃げこんだ。どうも彼奴等のすることはわからない、大胆なのか呑気なのかぼんやりなのか食いさしの飯が大釜のまま道路上に捨ててあるような狼狽ぶりを見れば日本軍が近く追撃してきていることは百も承知でなくてはならぬ、あるいは全般的の情況がわからない結果なのかも知れない。

この付近野菜は豊富だったが豚も牛もいない、鶏もたぶん支那軍が食ってしまった後だったに違いない。

粉末味噌がまだ残っている、名ばかりの味噌汁と携帯の白米が夕食。

戦闘一段落、約一週間ぶりに安心、熟睡。

息をつくひまもなき急追の激しさに

敵屍は路にクリークにみつ
爆弾の跡に死屍折り重なりて
白飯のこぼれいる見ゆ哀れなりけり

ぶすぶすとまだ燃えている橋梁の
ほとりに捨てしマキシム重機

頭髪にそれと知らるる女兵士の
死顔のぞき暗然とする

吼口山（無錫の前進陣地）の払暁攻撃

十一月二十一日、未明集合、第二線にあった歩三八を前衛に出して追撃を続行。前回に述べることを忘れていたが常熟陣地攻略後の追撃に馬がなくては苦労のたねと思い、藤椅子をさがし出しこれに二本の棒を結びつけて苦力にかつがせ、大谷刑部を気取って行軍する考案ですでに予行演習まで終っていたが、どうも気がさして実行する気にはなれなかった、それというのが予は行軍には

まだまだ自信があった、左右三つあて肩にかけた装具の重さは相当こたえるのであるが猟銃を肩に終日山野を跋渉した経験はまだ生々しい、がまんをすれば一日七里や八里の徒歩行軍には堪えられることは実験済であったからだ。事実馬を奪われた指揮官が歩くことに堪えなければ敵を急追することはできないのである。

あたかもよしその日歩三八長が自分の乗馬をもって来て提供するという、これ幸と思っているうちに予の乗馬がやっと追及して来たので遂に醜態を見せることもなく部下の馬を取りあげる必要もなくて済んだことである。

歩兵砲隊や機関銃の挽駄馬も次々と到着した、ただ心がかりなのは歩兵砲の弾薬補充が思うようにいかなかったことである、しかしそれも追撃第一日の前夜発動艇を支塘鎮まで往復させ辛うじて若干の補充を受くることができたのである。

この日依然として歩一九旅団の部隊は進出せず、ただわずかに昨日の歩二〇の二中隊のみがわが前衛司令官の指揮下に入っているのである、情況が十分にわかっていないためか師団命令はいささか腑に落ちぬ、作戦地境なんかどう考えてもわからない、結局予の部隊が三個の縦隊の任務をひとりで負担することとなった。

この日は平凡きわまる行軍を実施した。相変らず沿道には装具器材が捨てられ人馬の死体が多数転がっている。傷者が力つきてくたばったらしく思われるもの、運搬していたのを途中に遺棄したらしいもの等もあり、そしてところどころ空爆の跡とその付近に比較的多数の死屍が散乱しているようなのもあった。

これらの死体が不思議とほとんど全部少しも無念の形相といったような不快なのがなく昼寝でもしているかのよう、皆いい合わせたように平和な顔をしていることであった。女兵士の死体もあった、何ものの悪戯かズボンを押し下げて恥骨のあたりほのかに黒いものを見せているのがあった。将兵の眼に一瞬言うに言われぬある種の感覚を伝えたことは止むを得ないと思って貰わなければならぬ。

夕刻前衛の先頭は安鎮付近着、敵の射撃を受く。敵は迫撃砲で撃ってきたが我には一門の砲も到着してはおらぬ。

作戦用の地図に記入せられた所によればこの付近の地形は左に徒渉不可能なるクリークを控え、前に吼口山の

高地が厳然とそびえ、それが向って右前にあたかも鉄腕を突き出したような形になって凹角を形成している、その突き出した腕の尖端に既設陣地が記入してある、而してこれが間違いないとすればわが前衛は微弱なる敵の抵抗を排除して既にその凹角内に入り過ぎているのである、「これはことだ、敵の撃蹄にかかるようなものだ」一抹の不安が脳裏を往来する、が兎もかくクリーク沿いの大きな家屋内に入って戦闘司令所を開設した。

会客室とも見える大きな土間の室には焚火が燃えていて、その周囲には椅子が今しがたまで人のいたけはいを見せて四ツ五ツ並べられている、ここに一戦を交えんとする敵が恐らく一時間もたたぬ以前にここに司令所を置いてわが軍の近接を待ったであろうことは一目して了然たる有様であった。

すると不意にこの家屋の後方に続く他の家屋から火の手があがる、敵が放火して撤退したことは明瞭である、しかも火勢は猛烈にして刻々迫ってくるので止むなく更に位置を転じて前進し小学校に司令部を開設した。

屋根に登って前方を展望すれば吼口山の頂界線には点点として右往左往する敵影が双眼鏡裡に映ずるのである。

軽戦の後に撤退した敵情から判断すれば「吼口山付近一帯の敵陣地は無錫前方の前進陣地にちがいない、軍の判断に敵は無錫には止まらないだろうとあるのは事実でない、さすればこれは軽率な行動をしてはならぬ」

しかし我第一線はすでに敵の待ちかまえた凹角内に深入りしているのである、今さらひくことはならぬ。

「既設陣地の一翼から壊していくか？　時日を遷延するばかりだ、一気呵成に突進するか？　しかし後方を包まれることを覚悟せねばならぬ」

旅団長の決心如何？　予は断乎として後者を取った。

作戦図に記入せる堅固なる敵の既設陣地は作戦路をへだたる約一千メートル以上の北方にあった、予は支那軍が陣地を捨てて反攻する力の微弱なるを知るが故にこれを無視する決心をとった、突き出された腕の高地に約一千の敵がいるとの斥候の報告も受けていたがこれは予備隊を向けて置けばよろしい、とにかく第一線部隊をもって遮二無二前面の敵陣地を攻略しよう、これが敵の裏をかくゆえんであると腹を決めた。

夜に入って連隊砲が到着した。

払暁までに歩三八を凹角内深く進入せしめ吼口山の高地脚の敵陣地に対して攻撃を準備せしめ特に腕の付け根にあたる陣地の鎖鑰地に重点を向けさせ、歩三三を予備隊としてわが右翼に出撃してくると予想される敵に備えた、するとなんと情けない敵であろう、この果敢な捨身の攻撃準備のために伸ばされた左腕の高地の敵が夜間逃げ出したのである。この左腕の配備こそわが軍を死地に陥入れるたねであることは苟くも戦術を解するものの直ちに首肯するところのものであらねばならぬ。

「敵はまじめに抵抗する意志はない、この陣地は必ず容易に攻略することができる」

十一月二十二日、払暁前に行動をおこしたわが第一線は、桑畑の中に点在する敵の掩蓋銃座から撃ちだすチェック機銃のために多少の損害を被りつつ天明一挙に山麓の敵陣地に突入し、息つくひまもなく敵を掃蕩して、午前八時半には付近一帯の陣地を攻略し直に敵に尾撃したため、吼口山の山腹は実に死骸の山を築いて嚇々たる払暁戦成功の戦例をつくり得たのである。而してこの攻撃成功の動機が伸ばされた敵の左腕の付け根を払暁前一気に奪取したことに在ったのである。

連隊長は鼻を高くしていた。

敵の遺棄した書類によって敵はこの陣地の主攻撃を左腕の高地の突端と判断しているのが図上に記入されている矢の方向を見て知られた敵は恐らく予期せざる裏をかかれて周章狼狽したに違いない、だがその予期する我の主攻撃方面の兵を撤去し、凹角内の主陣地の敵が安心して油断するというこの矛盾はけだし支那軍統帥の不統一拙劣を示すものであって、統帥はまるでお話にならぬことを如実に物語るものである。

この日一部を民船によって敵の右翼に迂回させたが大なる効果をあげるに至らなかった。

敵陣地攻略後わが部隊は直に追撃にうつり十時半頃には鴨城鎮の敵を駆逐した。敵は歩々の抵抗を試みたけれど大体において浮足立っていのでぐんぐん押し付けることができた、かくて無錫前面の敵前進陣地は瞬くひまに攻略することができたのである。

沿道には堆土、樹林、農厦を利用して多数の掩蓋銃座を設置していたが、わが軍に急追されたため抵抗のいとまがなかったらしく、畑地にも道路にも実に無数の死屍を遺棄していた、払暁攻撃の成功と果敢なる戦場追撃の

戦果が如何に大であるかを実験した次第である。

この追撃中道路上に立って何か言っていた一准尉が予の眼の前で音もなくたおれたので、あっけに取られたが流弾に気管を貫通されて即死したのであった、何処でどうなるかわかったものではない。

正午頃草場旅団進出、予は部隊に集結を命じ且つ師団命令によって道路の右翼に移動した。

沿道の橋梁は大部分確保したが比較的大なるものは焼却されていたので重砲も戦車も進出ができない。

この夜鴨城鎮に宿営、焚火の後始末悪く諸所に火災おこる。このことはかなり喧しく取締ったけれど何としても燃えやすい家屋であるのと、休止すれば焚火が欲しくなる気温だったので命令もなかなか徹底しなかったのである。後方部隊は宿営に困ったことと思う。

神兵は枚を銜みて暁を
意表に出でて敵牙城ぬく

無錫攻略戦

十一月二十三日、旅団は夜半過の師団命令によって右翼隊を命ぜられたので、両連隊を第一線とし払暁までに展開することを命じた。昨日の追撃部署によって大体の態勢は取れているはずであるから、この部署の実行は時間の僅少なるに関らずさして困難ではないと信じた。しかるに昨日における第一線連隊の追撃各縦隊の進路が適当でなかったためにその正面が本道に近くかなり収縮されたため第二線連隊がその間隙を埋めたのと、敗敵の一部がわが右側背の各所に残存して一々これを掃蕩するのでなければ敵本陣地に対する攻撃部署が取れないことを知ったのである。

けだしこれは一つには縦深陣地の常態であって吼口山の前進陣地より無錫前方の本陣地にいたる間は一帯の陣地帯をなし、本道上だけは楔状的に掃蕩したけれど道路を離れた地域には特種火点に拠る敵が頑張っていて、各所にいわゆる陣内戦がおこった形となったのである。

師団長は新嘗祭は無錫で遙拝式を挙げるのだと気おいこんでおられると聞いた。全体の部署を規正するため薄暮を利用して正面狭少となっている歩三八（実力五中）を左翼より引いて歩三三の右翼に転進することを命じた。

予備隊もまた右翼後に移すため高級副官に地形の偵察を命じたところ、副官は現地と地図の対照において約九十度方向を間違えたらしく、予が不審に思いつつ予備隊の転進を命じたる所、旅団司令部が一歩水田中の小径に一列縦隊となって足を踏み込むや否や側方近距離の堤防からチェックの狙撃弾が驟雨のように飛来してきた。先頭にいた書記とこれに続く予と副官とは思わず飛びのいてそばの桑畑に逃げ込んだ、これに連れて予備隊にもざわめきが起ったようである。これはいささか醜態だった、思い出すと恥かしい。もっとも予備隊の移動すべき目標は一物の遮蔽もない水田を横過して七八百メートルを敵弾に暴露することの無意味なるは当然だったが……

だがこの敵弾の方向によって予備隊が今やわが第一線の展開正面を外れた外側に向わんとすること、これを実行すれば予備隊の全部が予期せざる戦闘加入を行わねばならぬことに気づき、改めて左前方に転進することに変更した、そこで今度は部隊に躍進の部署をさせ整然と移動を実施させたのである。

移動方向を変更したことを敵弾を受けたため中止したと兵は解したらしい、当番兵がそういっていたが、結果から見れば正にそうである、指揮官に人の胆視を正うすることを要求してあるのはこれだ、小さいことながら予は悔恨にかられた。

この付近の一般地形はクリークの縦横に走り、平地は水田又は畑地の間にやや小高い桑畑が点綴し、その間に極めて遮蔽せられた(傍)蓋銃座があり、逃げ残った少数の敵がいたる処に匿くれて狙撃してくるので、戦闘は捗々しく進展せず、旅団司令部もまたその前面は全然敵に対して暴露していたので、何処とも知れぬ方向から絶えずチェック機銃の見舞いを受けなければならなかった。

日没以後各隊は当面の敵を駆逐し、夜半概ね所命の線に進出することができたのである。

この夜何村五と称する小部落の長屋然とした農家の一室に箱と板とで作った台の上に藁を重ね、焚火に暖りつつ寝につく。

小雨降り冷気あり、終夜銃声断続す。

十一月二十四日、歩三三は午前中長大厦鎮を攻略し続けて前進、三八はその右翼にややおくれて攻撃前進し、後歩三三の進路を経て再び右翼に進出するの止むなき地形だった。長大厦前方畑地の塹壕に遺棄された死体の中

に壕を掘開しつつ鍬を持ったまま死んでいる農夫、弾薬箱を抱いてうつ伏している女の死骸なんかあった。敵の土工作業は土民に負うところが多いのである。

正午頃長大厦鎮に投下された一個の慰問袋を受取った、カタの通り褌、ちり紙、雑誌、中にもホープが二罐、キャラメルと氷砂糖若干が入れてあったのは特に嬉しかった、煙草と糖分とには既に十日以上飢えていた、早速司令部指揮班全員に分配した。これは軍艦竜驤の偵察機より投下されたもので竜驤の艦長は満州国軍政部顧問時代の予が友竜崎留吉大佐のはずであると記憶する。

この日両連隊の攻撃は着々奏功し夕刻までに概ね敵の防御主線の前方まで逐次に攻略することができた。

この日午後敵約一千東亭鎮（本道上にあり）より水路によって北方に兵力移動を行うとの報に接し、予備隊より歩兵一小隊をその進路に出し激撃を命じたが既に時機を失し通過した後であったらしい、然るにこの敵は健気にも突如歩三三第一線の後方に上陸し来り第二線にあったわが歩兵一中隊と約百メートルの近距離において遭遇戦を交うるに至った。敵は我を小勢とみて小癪にもチェック軽機を「腰だめ」で撃ちながら常歩のまま襲いかかりわが隊は喊声を揭げて突撃に移った、桑畑と茄子の畑の中に彼我入り乱れ剣戟肉弾相撲つの修羅場を演じ、しばしは勝敗の決いずれにあるやを弁じ難かったが、我の気魄遂に敵を圧倒し、敵は多数の死体を遺棄して敗走するに至った。

左翼の方第十一師団の方面においては戦況少しも進捗せず、ただ本道上においてわが師団が東亭鎮陣地の第一線のみ辛うじて攻略することを得たのを知る。

この日午後歩二〇（一大欠）を予の指揮下に増加せらる。司令部を分水墩に設置す、大毎の記者来り、多少の食料を分ちくれる。終夜側方より断続的にチェック機銃の狙撃来る、壁、樹林の分ちなくピシリピシリとお見舞する。

土間に藁をしいて寝床をつくる。

夜歩二〇の命令受領者きたる。該隊に歩三八の右翼に進出することを命じてそのまま横になる。

十一月二十五日、降霜、払暁前歩二〇（一大隊欠）来着、連隊長依病入院のため青木少佐代理す。この日敵総退却の徴あり、師団の追撃命令下る。

午前七時半出発、歩三三の進路に沿って第一線に出

る、とちゅう狙撃弾しばしば来る、死傷なし。

歩三三は敵本陣地の前方約二百メートルの線に膠着して昨日来頑強に抵抗する敵を攻撃中であるが水流のために妨げられて戦況意のごとく進捗せず。

予は予備隊を掲げて敵の側射する急造舟橋をわたり歩三三連隊本部の位置にいたる、敵弾は前方及び左側方より間断なく飛来して壁にあたりピシリピシリといやな音を立てている中に連隊長以下連隊予備が家屋の後方に伏姿して待機していた。今しがた連隊旗手が腹部を貫通されて後送されたと聞く、多分だめだろうという、好個の青年士官だったが、止むを得ない、ただ暗然たるのみ。

当面の戦闘はその後少しも進況を見ない、敵陣地の前面はクリークと湿地なので実はどうすることもできないのである。右翼方面には激烈なる銃砲声がする。しかもそれが次第に熾烈をくわえるのである。わが部隊方面を突破されれば敵は直にその退路をおびやかされることになるのであるから、死物ぐるいになって抵抗するのは当然だった。

弾雨の下に四時間が経過した、すると予の右側方に寝ていた幡野清副官が不意に、

「あっ、閣下やられました」

という、高級副官古見政八郎中佐がはい寄って点検すると弾丸が二発大腿部を貫通し、その一発が射出口のところに止まっているのである。敵弾はわれわれの伏した上方数サンチを飛過しているのだ、幡野が寝ぼけて脚をあげた瞬間に撃たれたのである。

「何をぼんやりしているのだ」予はおもわず叱咤したが、この正直な将校に悪いことをいったと直ぐ後悔した。

動脈を傷つけていないらしく出血も疼痛も比較的少かったので屋内の寝台の上に収容された彼は元気だった。

「閣下、大丈夫です」

このままでいては敵線は突破することが不可能である、連隊長は主力をもって北方に転進することを計画していると、師団命令到着、無錫東部郊外を掃蕩せよとある。が当面の敵はそれどころではない。よって極力民船を収集し前面の敵を避けて迂回進出することを企図しているうちに日が暮れた。夜に入って敵はまだ退却を肯じなかった。

十一月二十六日、降霜快晴。

払暁以来前線前進開始掃蕩しつつ無錫――鎮江街道にむかって進出することに努む。

予は午前十一時半頃民船六隻をもって予備隊たる歩兵一中隊及び工兵一小隊をひきい、挺進して無錫停車場に進出せんとし、とちゅう舟を両岸につけて掃蕩しつつ前進す。

無錫東方の工場地帯に進出せるころクリークの南岸に無数の被服装具を遺棄してあるのを発見、直に上陸を命じて点検すると、水に溺れた者、気力つきて辛うじて陸岸にはい上がりおる者あり、この付近にて捕虜数名を得、尋問によって約一時間前多数の敵がこのクリークをわたり便衣にかえて敗走したことを知った。

とちゅう外国旗を掲揚せる紡績工場の入口には必らず若干の軍装がぬぎすててあった。逃げこんでいることは明瞭である。河岸にも多数の死体がころがっているのが目につく。

午後二時半頃、無錫中央の橋梁付近に上陸、三時停車場において師団長と遭遇、握手、

「よくやってくれた」

「おめでとうございます」

ただそれきりだった。煙草に火をつけてもらいまた水筒につめたウイスキーをもらったときは何だか子供にかえったような単純なうれしさが身にしみた。

破壊と抗略とに一空となった無錫の市街、新世界という大きな旅館、寝台ほか一物なきがらんどうの旅館に宿営す。

無錫の攻略は本道上にあった我歩三八のⅢが先ず突入し、予の右翼隊が敵の退路にせまったので遂に最後のとどめを刺したのであることがわかった。

麻袋につめた砂糖がバリケードにつかってあったので久しぶりに糖分にありついた、要領のいい部隊は罐詰、ブランデーなど徴発していた。住民はほとんど一名もいなかった。

寝具もさがせば有るだろうと思われたがよさせた。

生栗をみつけて来たものがある、焚火に焼いて食う、そのうまさは甘栗太郎なんかの比では無かった。

一本のブランデーをみつけて簡素な夕食。

前進陣地攻略以来六日間真に不眠不休の力闘を今夜は何事も忘れて死んだように熟睡して疲れを休めるのであった。

丹陽への前進

十一月二十七日、無錫滞在。

大本営設置せられたりときく、南京攻略まで前進を継続するのかしないのかわからない。杭州湾上陸軍が湖州を占領したときく。

無錫は水の都、運河が城外を回わり、水辺に大厦高楼櫛比、繁盛時の殷賑をおもわせるものがある、しかし宿舎にあてた新世界旅舎の二階の壁がぶち抜かれて銃眼がつくられ室内には土嚢をつんで掩体がつくられたり、家具やがらくたや帳簿が足のふみ場所もないまでに散乱しているあたり、そして諸所に火災がおこり道路の向い側が昨夜からパチパチ燃えていたり、百貨店ががらんどうになって窓ガラスが空爆のために滅茶滅茶こわれていたりするのをみるとそぞろに無辜の住民のために、一掬の涙がさそわれるのである。

城内外を視察す、種々雑多な兵隊でゴッタ返し徴発物件を洋車につんで陸続と行くあたりまるで百鬼昼行である。敬礼も不確実、服装もひどいのがある。彼等は戦争が一段落ついてしばらく滞在するのだと思っている、実際われわれにもそう印象づけられる示唆があったのであるから仕方がない。

上陸以来つれてきた七八名の苦力を大行李が追及したため解雇した、すると二三十歩も行かないうちに他の隊に捕えられそうになったので逃げもどった、「いつまでもつれて行って貰いたい、どうせ郷里へは帰れない」という嘆願だ。この苦力共はその後南京までつれて行って優遇してやった。

十一月二十八日、師団長へ現状報告。北支を立つ時補充を受けて兵員は過剰となっていたので、今日までの損傷はまだ補充の必要はなかった、しかし弾薬なかんずく歩兵砲及び重機関銃の弾薬補充が十分でなかった。兵站が思うように続かないことはわかるがこれが一番頭痛のたねだった。

意外、今夕にいたり前進命令来る、長期滞在かも知れないと思ったところに前進命令であるから意外ではあったがわれわれ将校は皆南京まで行かねば嘘だと考えていたので快哉を叫んだ。

葡萄酒を見つけだしてきて会食、夜寒気のためバケツ

で火桶をつくり木炭をたく。薄い敷蒲団一枚だけ見つかる。

十一月二十九日、草場旅団の主力が追撃隊となって先行、予の部隊は師団の左縦隊となり京滬鉄道の路盤を前進、途中橋梁の破壊はなはだし、修理しつつ進むため行軍遅滞す。沿道死屍及び遺棄せる装具被服がはなはだ多い。空爆の大きな跡が水溜まりになっている、貨車が数両横倒しになっている、この付近の死屍は皆くさりかかって顔が真っ黒になっていた。

女兵士の死体が一ヵ所に三つころがっていた、ズボンが○○られているので○○がほのかに○われた。

この日夕刻草場支隊は軽戦の後常州を占領した。

前方に係留気球が見える、第二線にある呑気さが今われわれにあるのである。

横林鎮に宿営、運河に太鼓橋がかかっている、それを渡ったところに大きな家を見つけて入る。副食物は水牛とからし菜、寝具は副馬につけた毛布と薄いふとん、かしわ餅になって寝台のうえに寝る。

十一月三十日、京滬線をはなれて自動車道を進む、午後二時常州（武進県）へ入城。

この日第二線のことゆえ、終日ただ平凡極まる行軍をなすのみ。

城内に宿営、火災の跡多し、住民稀。

十二月一日、追撃隊は歩々抵抗する敵を撃破して進路をひらく、沿道火災多し、遠く近くの部落にも火災の煙天に沖し、竹や銃弾ないし手榴弾のはぜる音が間断なく聞える。

この日侍従武官こられ先頭部隊まで視察。

九里舗に宿営す。感冒のため夜に入りて咳はなはだしく眠成らず。

十二月二日、追撃隊は丹陽東側の敵収容陣地を攻撃して夜に入る。

この日も終日退屈な行軍の後彭家庄付近の名もわからぬ貧村に宿営す。道路を若干離れた農家なりしため鶏を徴発することができて久しぶりにお菜らしいものを食す、ただし塩気ほとんどなし。

感冒のうえに寒気くわわる、木製の寝具のうえに藁をうんと積みあげてもぐり込む、土間には焚火、椅子や机や水車が兵隊の焚物となる、穂のついたままの稲でさえ……。

この日歩二〇は敵の退路を隘して五百を屠殺せりと。夜敵まったく丹陽城より撤退す。

十二月三日、午前丹陽着、その西側に集結。軍は南京の敵が退却しつつあるものと判断し師団に急追を命じた、しかるに当時我師団は歩兵各隊の大小行李ならびに野砲兵連隊の連隊段列未着のため、集結整頓をなすにあらざれば前進は不利なる状態にあったので、師団長は前進を中止せられたのである。

空中偵察によれば、句容にも既設陣地がありその後方は増強せられつつありと、いずれとするも相当の戦闘を予期せぬ限り南京まで進出することはできないのである。

この日受診、気管支ややおかさる、無錫以来の湿疹はやや快方に向う。

丹陽城内に舎営、日本留学生の住宅らしい、子供の着物一枚発見、夜間冷える腰に巻く。

十二月四日、大行李到着し外に水路による輸送ありて多少の食料（むろん罐詰）にありつく。

この日も丹陽に宿営、前進を準備す。

城内に残留した支那人が労役を肯ぜざる由を聞く。

満州国治安部大臣から寄贈された慰問品到着す。多数の煙草およびウイスキーなり、師団司令部および部下両連隊にもわかつ。

南京攻略作戦

右側支隊としての分進

丹陽滞在は南京を攻略すべきかいなかの方針が大本営において決定しなかった結果と聞いた。松井司令官は重任を拝した時に南京を攻略するにあらざれば戦局を解決することは不可能であることを側近者に漏らされたとも聞く。

無錫での足踏みが長期滞在とのことは暗示はされたが適確には示されなかった、しかし丹陽ではほぼ確定的のように内示され、休養施設に留意せよとまで指示されている。いずれにしてもここに進出してもまだ南京を攻略する腹が決まらなかったことは明らかである。その当時の事情とその後南京を攻略した以後の戦局の発展とを考

え合わす時、興味ある話題はむろん起るのであるが機微にわたることはここに略す。

丹陽滞在間予の部隊は一部をもって南京方向に他の一部をもって鎮江方向に対し警戒した。鎮江を攻略する必要が起るかも知れないので特に密偵を出したがこれは間に合わずかつ必要も無くなったわけである。

感冒がこじれて夜間の咳がはなはだしい、熱はないからただ湿布するだけだったが爾後一週間以上悩まされたのには困った。

十二月五日、前日命令あり「南京に向い追撃を続行すべし」とある、一度休止を命じて置いて追撃続行もおかしいがともかく○○会議で決定を見た結果であるから勇躍前進につかねばならぬ。

この日師団の第一線部隊は南京の前進陣地攻撃にかかっていたはずである、はるかに砲声を聞きつつ予の部隊は師団の第二線となって終日退屈な行軍をした。

師団本隊の先頭には歩九がいた。

第一線の戦況は逐次発展しつつあった、夕刻開進。予は橋梁を修理しつつある師団工兵の焚火にあたらしてもらって夜寒の風をさえぎり行厨を喫す。工兵中隊長と残り少なのチーズを分って食べる。

右側に歩兵二大隊内外の支隊を出すことになるかも知れないから地形の研究と偵察をしておけとの師団命令だったので歩三八長にそれを移したが予は内心危ぶんだ、この広大なる正面に二大隊の兵を打ち込むことは実際危険だったのである、けだし鎮江方面江岸ぞいの地区とは有力なる敵がまだ残存しているので、この支隊は敵を後方に見て進入することになるからである。

黄土橋と称する農村に分散して宿営す、久し振りに豚にありつく、支那味噌を使っているが相変らず塩気がたりない。一体兵隊の豚料理は慣れぬせいで贅沢極まる解剖をやっている、頭も足も残して胴体だけしかも肋には肉が残っている、だからこの残骸だけでも相当以上の料理が出来るのである。

夜に入って師団命令を受領す、右側支隊は予が一個連隊を率いて任ずることになった、連隊長も安心したといっていた。実際安心はしたものの敵中深く侵入することを考えるといささか悲愴な感もするが、紫金山の北は十年前の予の猟場である、何程のことがあろうと思い定め、今後の作戦を胸中において練り、ほがらかに熟眠を

取る。

十二月六日、この朝結氷す。

予は歩三八および衛生隊三分の一を率い右側支隊となって本道を離れた、道路らしき道路が無い、しかし畑地であるから無理をしても連隊砲は引っ張って行かねばならぬと決心した、始めの内は大隊砲も速射砲もどうにかついてきたが次第に遅れ勝ちとなった、結局爾後それ等の護衛や援助ですくなからぬ兵力を割かねばならなくなったのである。

この日師団の追撃隊は句容を奪取して湯水鎮に向い追撃し、その西南にある西山頭および小銭村の敵主陣地攻撃に着手するとの通報があった。

畑の中を一列縦隊となりしかも進路を求めて行かねばならないので行軍は大いに渋滞し日中に外翼まで進出することができないので山地の隘路を前にして停止するのやむなきに至った。

この日斥候の報告により歩九の一部隊がここを通過北進したとのことであったが戦闘地境の関係上予には信ずることができなかった。

宿営地は余家山、山裾の寒村、焚火と藁だけが馳走だった。

下鴨亭付近の戦闘

十二月七日、早朝出発、山地内に進入。一部を右方に出して外翼を警戒させ、主力をもっておおむね南京の北方地区を目標とするごとく進路をさだめ敵と衝突を予期しつつ前進を開始した。

清冽なる湧水を見つけ、躊躇なく馬上でがぶがぶやった、水呑罐はいつも水筒の紐に結びつけている。生水を飲むのは出征以来始めてだった。この付近の山系に無菌の湧水があることは想像される、しかし生で呑めると断定しても多くの将兵は飲まなかった。

意外なことには我進路にあたり歩九の一部隊が我作戦地境内に存在し優勢の敵と対峙しているのを知った、銃声によって判断すれば相当苦戦をしているらしいこともわかる。しかし予はむしろそれを枢軸としてさらに外翼にでることによってこの部隊を救い予の部隊の進出にも便しようと決心をし進路を変更して北進したのである。

するとさらに意外なことにはこの進路の前方にあたり

歩九の主力が展開しているのである、これはまったく我右側支隊の作戦地の全面をとっているので師団命令によって規定せられた各隊の戦闘正面の配当が全然蹂躙されたことになるのであるから予は憤然として独自の行動を執りもって任務の達成をはからむと決した、そこで主力をさげて敵の中間を突破して進出することにさだめ、まずその基本となるべき部署を命じ、万一を慮って相当の予備隊を控置した。

これよりすこし先、連絡のために派遣した古見副官が帰来しての報告を統合してみると、追撃隊の右に進出し湯水鎮前面(?)の敵の拠点陣地を攻略すべき命をうけた歩九が敵の正面をさけて右翼に迂回し、そこでさらに高地による敵の一拠点に衝突してこれに一部をさいて転進し、最後に優勢なる敵と最外翼の上鮑亭南方高地一帯において遭遇し、ここにその全力を展開したものであって、八キロ以上の正面に歩兵二大隊を分散していたところ正面薄弱となって機動の自由はおろか進退にも窮していることがわかったのである、現に予が主力を提げて進出せんとする平野南側高地は一度奪取したる後敵のために奪回されている。歩九連隊長の伝言によれば連隊長のいる方面には迂回し得る敵の間隙があるによってこの方面に予の支隊の主力を用いんことを勧告するとのことであった。

この際深く立ち入って当時における予の判断を述べることを避けるが最初の予の決心は変更するのほかはなかった。そこで予は予備隊をひきいて歩九の主力の位置に前進をしたが、この時歩九はすでに隻影をも止めなかったのである、第一線部隊すら敵情の引きつぎもなく守備線の交代も行われていなかった、とにかく奇怪極まる行動である。敵が無為にして出撃しなかったからいいようなものの万一逆襲を受けたならば相当な苦戦におちいったであろう。

がとにかく当面の敵情地形のいっさいは不明である、偵察を行わぬかぎり陣地による敵の攻撃開始は不可能と思わねばならぬ。

午後五時半頃予は連隊長とともに隘路口の高地脚に進出し、双眼鏡をもって前面を注視していると突然機銃弾が脚下の砂を蹴って降ってくる、それによって前面七八百メートルの高地に敵がよっているのがわかる。

全般の情況を判断するに敵は我歩兵第九連隊の主力と

不意に遭遇しそのまま陣地に固着したこと、この敵はおそらく鎮江方面より撤退すると想像せらるる約一個師団の敵を収容するために派遣せられたものであろう、そこで予は猛烈果敢なる攻撃によって一挙に敵の抵抗意志を破砕する決心を執り、その頃ようやく敵陣地近く進出して攻撃を開始しつつあった第一線に果敢な逼迫攻撃を命じ、幸いにして敵陣地を奪取し得ばただちに縦隊追撃に移ってどこまでも敵に追い縋るつもりであったのである、予備隊より有力なる将校斥候を右翼方面から出して敵の間隙に潜入を試みさせたが行かれない、それは数百の敵が未だ我支隊の右後方に残って後から射撃してきたからでもあった。これは捨ててもおかれないが手当のしようもなかったのである。

かくして暮れ易き冬の日がとっぷりと暮れた。

夜に入って戦況は多少発展したようにも見えたが敵の抵抗は依然頑強をきわめたので当初における予の判断いかんにかかわらず明八日さらに砲火の威力を発揚して攻撃を再興するのほかはないと思われるのであった。

この夜は百家庄部落付近の谷間に四方を警戒しつつ天幕露営をした。

この日中島師団長は湯水鎮前面の砲兵観測所において戦闘指揮中受傷せるも、腰部軟部貫通の軽傷にて在隊、指揮継続中との通報をきいた。

十二月八日、昨夜来夜間の我攻撃続行が功を奏して払暁までにおおむね敵陣地を奪取したが敵はすでに後方近く下鮑亭付近に第二線陣地を構築して頑強に抵抗し大隊砲のみをもってしては昼間攻撃はなかなか成功しない、それでも我歩兵は斜面を攀登して肉迫し、ここに手榴弾戦や石合戦が始まったが敵もなかなか揃拗であって毫も撤退の色が見えないのみか盛に迫撃砲を撃ってきてその一弾は我連隊本部の家屋に命中し、通信係将校および書記をはじめ一挙に十数名がやられるようなことになってきた、連隊長はその瞬間先に弾丸の射向を察して本部の位置を移すことを命じ自ら軍旗を奉じて一歩門外に出るやいなやこの始末だったのである。

（連隊の電話通信兵が命を受くることなく悲観的の報告をしたのはこの時である）

連隊本部のすぐ側に前進していた旅団司令部も盛に射撃を受ける、僅かなでこぼこと繁茂している灌木の遮蔽を利用して敵弾を防ぎ、攻撃奏功の時機を待つ外はなか

ったのである。

午後二時半師団司令部より無線通報あり、師団主力は湯水鎮を占領した由。

歩九より通報、歩九の歩兵四中隊は右側支隊の左翼大孤山に展開し戦闘中なるを知る。

午後四時頃我連隊砲および速射砲到着し掩護部隊も復帰したるため支隊の兵力やや充実す、この頃支隊に配属された野砲兵第一大隊、迫撃砲一小隊また到着、以上はただちに戦闘に加入せしむ。

かくてまず連隊砲を敵前約五、六百メートルに推進して陣地に進入せしめ、迫撃砲また砲一門を陣地につかしめ、道路に近き下鮑亭南側の高地に向って砲弾を集中せしめた、この砲撃の結果はたちまち偉大なる効果を奏し敵に退却の色が見えるに至ったのである。後に占領後この付近を視るに稜線にある陣地は勿論のことその後方の斜面は真に死屍累々として足の踏み場もなきほどであった。

その頃夕陽西に没し暮色が四辺をこめて至らんとする時であったが、鎮江――南京道にそう天華山系の稜線に陸続敵が展開して工事を始めるのを発見した、まさにわがま後ろにあたる方向である、もしも大部隊の敵が山を降って来たならば我支隊は腹背に敵を受けねばならぬ、そうなれば厄介千万でありすくなくとも前進は阻止されるから何等かの手当を必要とするのであるが、といって兵力はほとんどない、――予は一気呵成に敵陣地を抜く目的をもって予備の大部を第一線に増加し今や僅かに微弱なる歩兵一中隊を掌握しているばかりであったからである。おそるるにたりない敵ではあるが、捨ててはむろんおけないので、やっと陣地に進入したばかりの野砲四門を後方に向けて反転させ、約千五百メートルの射程をもって高地の頂界線を射撃させた。試射数発の後ただちに効力射に移るや敵は三々五々退却して稜線の後方に姿を匿したのである。これに依って鎮江方向よりする敵は今尚退却を完了して居らぬことがわかったのである。

薄暮に乗じて前面の敵は退却を開始し我第一線はすぐに戦場追撃に移りおおむね所定の線まで進出したが暗黒と各部隊に推進力なくくわうるに総予備はさきに損傷最大なりし百名弱の一中隊に過ぎなかったので、それ以上果敢なる追撃は不可能であった。

左第一線は師団主力方面より江岸に向って退却する敵

縦隊を発見約千メートルの距離において重機をもってこれに射撃を集中し敵をたおしこれを大混乱におとしいれている。

この日夕刻戦死者を荼毘にふしたが、道路のすぐ側の乾田に穴を掘り材木を渡して安置し、兵隊の僧侶にて読経をあげた上薪や藁に火をつけるのであった、これだけはどうにも見るに堪えられない戦場の悲劇であった。

敵前九十度施回

十二月九日、未明行動を開始したが態勢をととのえた時は結局夜が明けていた。

敵の死体が田圃に幾つもころがっているなかを乾田中の小径を三縦隊となって前進する。砲兵の進路が一度揚子江岸ちかくまで進出したのち九十度左折しなければ通過ができない一本道路であったのと、ともかく敵を一度江岸まで追撃しなくては目ざす南京北側地区への進出ができないので、昨八日夜の戦場追撃はすくなくも敵に脅威をあたうる程度に前方まで進出しなくてはならなかったのである。しかし僅かに二日間の力闘ではあったが兵の体力はかなり涸渇していたのでこの夜間追撃は実際活発を欠いた。そしてその夜のうちに鎮江方面よりする敵の退却がおこなわれたらしく列車の運行する火光や轟轟の音がきこえたのであった。

施回の角頂にある東陽鎮付近にこの朝大なる火の手があがっていた。敵は退却する縦隊の側翼を放火によって我軍から阻止しようと試みたらしい。

鎮江から退却する敵に対し無二無算にかかって行かなかったことの可否は別に議論の余地があるかも知れないとおもうが、我支隊の任務はすみやかに邪魔する敵を蹴散らして南京城の背後を遮断しなくてはならないのである。したがって、道草を食うような行動は予としては断じて避けることに決心していたのである。

しかしこの行動は実は無暴にちかい危険性をおびていた。

「閣下大丈夫ですか」

「なに大丈夫さ、逃げてゆく敵には振り返ってくるだけの勇気はない。やって来れば来た時の話さ」

副官は予に絶対の信頼をもっているからこの問答も実は御座なりに過ぎなかった。しかしこれが図上戦術なら

ば甲論乙駁はあるとおもう。慎重な戦術家は少なくも三乃至四分の一の兵力は残置したであろう。

前衛、右側衛、後衛を設けなければ危険を感ずる行軍部署である。したがって例の如く支隊本部は僅かに一個大隊に足りないのであった。

午前十一時新態勢において行動開始、幸いにして敵は我を追尾して来なかった。

七日から左翼大孤山に膠着している歩九の一部隊に対して、我支隊に連係して前進することを要望してあったが、ついに前進せず、午後にいたって行動をおこし我隊の後方に進出して来たのである。がんらい我支隊の進路は大孤山正面の敵の背後にあたるのであるから此方面の敵はつとに退却していることと思われるのであるが……。

ともかく我らは他人をたのむ必要は豪もなかったのである。

午後二時半我前衛は東流鎮付近の敵より射撃をうけて停止、敵の警戒陣地らしい、よって直に砲兵に陣地進入を命じ、前衛歩兵の攻撃前進を援助せしめた。この頃右前の高地にも点々敵の散兵壕らしきもの及び若干の敵影をみとめ一部をもってこの敵をも砲撃せしめた。

砲弾がさかんに命中するなかを天空に投影する頂界線を腰をまげて登って行く敵をみとめた。この方面に一部の我歩兵をも向けたが敵の逃げ足の方が早かった。夕刻までに敵の警戒陣地を奪取し、若干前進したのち停止。

東流鎮に宿営。

これまで書くことを忘れていたが飲料水は毎日水の停滞したクリーク又は溜池の水を使用した。冬季のこととて幸いに下痢患者が多発しなかったので大いに助かっている。

予は南京付近の地勢を熟知しているので、我師団の作戦地域内にあたる中山門（東面）太平門（東北角で北面）の攻略は多大の犠牲をはらうに非ざれば成功しないものと確信していた。すなわち前者は前に跋渉不可能なる幅百メートル以上の水濠をたたえ、後者は深さ約二十メートルの外濠を有し濠底より城壁の頂上まで少くも五十メートルはあると見られる険要の地である、城壁の破壊なぞ容易ではない、それよりもむしろ我支隊の行動方面たる紫金山以北の地域に主力を用い、一路下関を望んで敵の唯一の退路に殺到するを兵要地理的の正当なる判断なりとして、その旨意見を具申したが師団長の決心はすでに

主力を中山門に向けるべく決しておるということで、予はその以後再びいうことを控えていた。各師団がすべて南京城めがけて殺到している時機であったからマラソン競争的の意識もあるいは有ったかとおもわれる。

しかし軍司令官朝香宮殿下も師団の主力は紫金山以北に使用するが適当なりとの意向を師団長にもらされた由であるが、すでに命令起案後の故をもって御意図にはしたがわなかった由である。以上は師団参謀よりの内報であって、師団命令とともに殿下の御意図として下関は敵の唯一の退路であるから有力なる一部隊を出すようにとの旨をつけくわえてこの夜予に伝達されたのである。予の意見が容れられると否とは問うところではない。予は三方より迫る敵に対し玉砕を期して任務に邁進すればいいのであった。

（右の師団命令によれば予の攻撃すべき目標は太平門である、これは前述する如くすぐ前に素敵に大きな外濠を備えしかも玄武湖と紫金山西麓の錯雑地を前地に控えている、それで敵の城外支隊を蹴ちらしてこれに主力を向けうるや否やは予が知れる地形上の判断では不可能事にちかい）

ふと思い出したことには一条の間道があったはずである、止むなければこれに小部隊をむけて所命を果そうとおもう。だが以前の駐在から十年の歳月が流れ、その間に要塞設備が完成したのであるから実際において左様な間道は現存していなかったのである。

揚子江畔の苦闘

前に右に後に敵を払いつつ
みいくさは進む野分のごとく

敵城外支隊との戦闘

十二月十日、地形が相当複雑していること、部隊が分散していること、また敵の城外支隊がかならず我支隊の外翼からかかって来るものと判断することによって早朝全態勢をこの目的に適するごとく規正する。

午前九時前進開始、微弱なる敵は軽戦ののち退却、これは師団主力方面が同時に紫金山東南麓に迫ったからでもある。午前十一時ごろには第一線は馬円南方高地から仙鶴門西北方高地へ進出することができた。

前面の高地には敵の既設陣地がある、滑稽なのは揚子江岸にむかったトーチカの背後がみえる。もっともこれは平時南京城の要塞化からみれば滑稽ではない。しかしこの方面は敵もたやすく捨てるわけにはいかないから相当の抵抗を受けることは覚悟せねばならない。

この日午後敵はさかんに迫撃砲をもって我第一線の後方を撃ってきた。道路にそう地域を五十メートルの射程伸縮によって規則正しく撃っている。田圃の土砂をあげ農家の屋根をふっとばし、樹木をなぎたおし、壮観をきわめたが、部隊は射線を避けているから盲射する敵弾の壮観を見物していられたのであった。しかし道路に近くてその上またたく間に百発以上撃ってきたので実は笑いごとではない。

我第一線は敵を駆逐しつつ夕刻までに堯化門西方一帯の高地を占領することができた。

この日松井軍司令官は守城司令官に対し勧降状をおくり午後一時を期して其回答を求められたが遂に答えは無かったと聞く。

深更受領せる師団命令によれば師団は十一日を期して城壁に突入するとある。しかし師団長の直轄となっている歩三三は未だ紫金山の最高峯を奪取していないから十一日に城壁に殺到することは恐らく不可能であろう。(師団長はあせっているな)後で聞くところによると十一日には第九師団の一部が光華門の城壁に取りついている。元来南京城の南面は近接容易な地形であって古来のこの城の争奪は常にここで行なわれているのである。雨花台の行楽地が比較的平易なる丘阜をなしていて城壁間近まで蔭蔽近接ができるからである。

紫金山の険要を抜かねばいくらあせっても城壁に取りつくことは不可能である。

この夜歩三三の第一大隊(一中隊欠)及び軽装甲車第八中隊を配属されるとの通報を受けた。

南京攻略後軍参謀より聞くところによれば殿下は予の支隊が広大なる地域において必ず苦境に立つべきを顧慮され、佐々木を犬死にさせるなとの御下命があった由、そんな有りがたい御沙汰はその時は知らなかったが、とにかくこの際一兵でも多いことは実に嬉しかったのである。

当時の戦況はさほど困難ではなかったが、敵はちくじ我支隊の右外翼に退避するものと判断され、しかも我後

方には至るところ敵兵残存して師団主力との交通自在ならず、一般の大勢としては予の支隊が孤立無援におちいっているのがわかるわけであった。事実孤立無援にして三方の敵を受持っているのである。

十二日の夜はるかに満州から来てくれた元の部下が師団司令部に到着して我支隊の所在をたずねた時「死ぬ気なら行け」といわれた由である。

ちなみに予は一兵も増援を乞うたことはない。あたえられた兵力をもって必ず敵の退路を遮断してみせるとの確信に満ちていたのである。

仙鶴門鎮付近の部落に宿営。終夜迫撃砲弾の見舞いをうけたが弾道をそれているので平気だった。

十二月十一日、銀孔山東西の陣地による敵に対し攻撃開始。九時増加部隊到着。これより先師団主力の攻撃に協力せしむる目的をもって一部を紫金山北麓を経て和平門方向に派遣したが、この方面に潜入すべき敵陣地の間隙はなかった。

午前十一時銀孔山東西の敵陣地を奪取す。この敵は実に頑強に抵抗した、砲兵をして集中射撃をおこなわしめたため敵の塹壕は死屍をもっておおわれていた。しかも我歩兵が斜面を攀登して突撃した時にでさえ陣地を死守してしりぞかぬ敵兵がいた。

この日午後我支隊へ協力のため十加二中隊及び十五加一中隊きたる。

銀孔山を撤退した敵は太平山方向に退却、ここにも既設陣地があってあらたな敵が抵抗する。くわうるに烏竜山砲台の重砲が右側背から、岔路口の敵野砲が左前から撃ってくる。しかし我もまた重砲三中隊と野砲一大隊をもってこれを制圧しつつ我歩兵は夕刻にいたって太平山の陣地を攻略することができたのである。

しかるに夕刻にいたって新たな敵が我支隊の右翼前方にあたる万家沖にあらわれて工事を開始したのであるが、もとより敵としてはさもあるべきことであって終始外翼から我支隊の前進を妨害するのが城外支隊のとるべき行動である。

戦術を学んだ者でなくては以上のぶるところの一般情況がはたして如何なる状態を呈し、指揮官以下の心境がいかにあるかを適確に知ることは困難であろう。これを今もっとも平易にのべるならば我支隊は目下敵の十字砲火と迫撃砲弾の下に暴露しつつ高地の既設陣地によって

頑強に抵抗する敵を白昼力攻しつつあるのであって、しかもたえず我右翼方面に有力なる敵が存在して妨害をつづけ、右側背にはこれ又敵が出没して後方部隊を脅威しあるいは師団主力との交通を遮断せんとしつつあるのである。かかる環境にあって尚かつ毅然として達成すべき任務に邁進し得たるゆえんは信念の力であることはもちろんであるが、戦場が予の熟地であったこともあずかって功あるものと信ずる。しかして白昼二回まで既設陣地を攻略し得たことは重砲の猛撃が協力してくれた結果であることは疑わないのであった。

この日師団の攻撃は進捗せずとの通報があった。察するところ歩三三はまだ紫金山第一峯を抜くにいたらず、また歩一九旅団はその山腹から南方丘阜地にかけて展開し中山門正面の堅固なる陣地にむかって攻めあぐんでいるのであろう。

これも入城後に聞いた話であるが、この日歩九が歩三三の左後方にあたる紫金山の中腹の一陣地を取ったのが早速大きくあつかわれ、京都の新聞記者によって〇〇連隊が十一日紫金山を奪取したと打電した由であるが、後日その新聞をみた予の部下の将兵のある者は火のようになって憤慨していた。実際六十余名の新聞記者が全部、交通便利な正面の本道に蝟集し、自分自身の一番乗りの記事を電波にのせるべく気負っているのであるから、軍隊は相当にめいわくをするのである。今日の戦争に一番乗りは問題ではない。むしろ縁の下の力持ちとなって他部隊のために犠牲となるものの働きが貴いのである。

西碼村に宿営。この日も終夜火光めあてに迫撃砲を撃って来たがほとんど損害はうけなかった。

行李の特務兵なんかでも流弾がヒューヒュー来るところにいて平気で炊さんもし用便もしている。要するに戦度胸ができたのである。

主陣地の攻略

十二月十二日、終夜咳がはなはだしく睡っては醒めして安眠がとれず、一ヵ月来の作戦に疲労したからだにはかなりこたえた。早朝おきてみたが頭が割れるばかりに痛みどうにもならず、重大時期にと考えてみても重い頭はやはり重い。

「副官、困ったな。これでは何も考えられん」

「お休み下さい。御計画どおり我々でやりますから」
「うむ」
藁の中に寝ころんでみたが激しい銃砲声をきいては寝てはいられない。
午前十時頃にいたり遂に意を決してとびだし銀孔山に指揮所を進めた。
塹壕やその後方の斜面は実におびただしい敵の死体である。
部隊は昨夜命じた部署について早朝から敵の主陣地帯を攻撃している。今日中にこれを攻略しなければ敵の退路を遮断することができない、そう考えるから病気なんかのため寝てはいられなかったのである。
みると前面近くの高地に三八長が突ったって督戦している。(やっているな) しかし予は直ぐさま電話をもって「軽挙はするな」といってやったのである。指揮官の勇敢なる態度は必要であるが、高い姿勢は敵弾を吸収する、そして損害をうけるものは周囲にいる者である。だがここにも高い姿勢が敵陣地を注視している、敵の小銃弾がさかんにやってくる。
烏竜山砲台からまた撃ってくる。高地の稜線後にいても砲台からは丸みえである。又この砲台の高射砲は最後まで我軍の飛行機を射撃していた、三門斉発の射弾がちょうど我々の頭上に炸裂するのをしばしばみた。
我十加が一万メートルの射距離で制圧射撃をはじめた、観測所が現在おなじところにあるので砲撃の結果を刻々知ることができる。命中弾を得たといっていた。
紫金山北麓の敵野砲もまたさかんに撃ってきた。
第一線歩兵の攻撃は幸いに着々進捗、遺棄死体などによって判断するに我支隊当面の敵は第七十八師と四十八師の一部であるらしい、数倍の敵を刻々圧迫しつつあるのであるから痛快である。
正午頃我右翼前方にあった敵を撃退し得たのでここに再び左旋回をおこない南京城北側地区に進出することに決した。一時ごろ堯化門(地名)付近の雑樹林において転進に関する命令を下した後行動につく、しかるに該地を去って五分間もたたぬうちに敵の迫撃砲弾が予が立っていた土まんじゅうに命中、それをふっとばした。
紫金山北麓を前進してこれより先敵既設陣地の攻撃を開始した歩三三の第一大隊は多数の死傷者を生じつつも敵を圧迫しているので、これを拠点として我支隊主力は

左旋回をなさねばならぬ、しかるにその進路は砲兵の前進に適せずとの砲兵斥候の報告であり砲兵大隊長も不可能であるとの意見なるゆえに砲兵を堯化門にのこし歩兵のみをもって前進すること決した。

本道から畑の中の間道に入ってまもなく忽ち石橋の落とされているのに会い、工兵小隊によって修理をくわえる間、ともかく歩兵の各砲隊ごとに山砲は苦辛しつつ畑の中に進入する。

この時師団長の多大なる好意によって清酒が一樽送りとどけられた。畑の中で鏡をうちぬいて勝手に飲ませた。予自身はじめ志気大いにふるい敵を呑むの慨がある。

午後三時ごろ紫金山北麓岔路口付近の敵撤退す、戦は勝ったとの感がする、しかし正面の敵はまだ頑張ってなかなか撃退することができない。

夕刻興街村着、紫金山の裾の寒村。一小隊を直ぐ左の高地にあげて左翼を警戒、前面からは小銃弾がプスプスやってくる。

この日砲兵の連絡将校に対していった言葉、

「南京攻略の最後の日晴れの戦場で地形困難のために砲兵がこの戦闘に参加できなかったことを連隊歴史に書くことはいやではないのか、しかし我々は歩兵だけで戦闘することをなんとも思ってないのだから砲兵は後方の警備にあたってくれ」

これがきいたらしい、夜に入って連絡将校帰来し、砲兵大隊長の報告をつたえる。

「来るなといわれるので一度停止することにしたがあくまでついて行くことに決心しました、ついては歩兵及び工兵の援助がいただきたい」

「よろしい、後衛から歩兵一中隊と工兵小隊を配属しよう」

無理な要求も武士の情けだった。

第三第九第十一師団の集成騎兵団が戦場に到着した、よってこれに戦闘正面を割愛する旨連絡将校をして伝えしめたが出ない、最後まで我支隊の後方衛生隊包帯所の位置に在ってしかもその夜痛い目をみたのである、これは後に述べる。

夜に入って重迫撃砲隊追及す、道路不良のため多大の困難をなめたことは連隊砲とおなじであるが、この気魄がなくては戦はできない。

この日深更師団命令とともに受けた通報によれば、

一、烏竜山砲台攻略のため第十三師団の歩兵一連隊が鎮江より前進中

二、第十六師団の右翼隊（歩三三）は十二日午後突撃三回の後紫金山第一峯を占領しつづいて天文台にむかい攻撃中

三、同右、左翼隊（歩一九旅）は孝陵街西方高地を占領

四、第九、第六師団は城の東南面及び南面に対し肉迫攻撃中

五、第五師団の国崎支隊は蕪湖にて揚子江を渡河し浦口にむかい前進中

以上、これを要するに南京の落城は目睫の間に迫っているものと判断されるのであった。

退路遮断

十二月十三日、十二日の夜は至るところに激烈なる銃声をきき、後半夜には砲声さえもきこえた、しかし一般の情勢から判断すれば落城は刻一刻ちかづきつつあるので、予備隊のすぐ左にある高地に敵が出てくれば忽ち苦境におちいらなければならず、しかもここに僅か一中隊の兵力を割くことができるばかりの手薄だったに拘らずきわめて安易な気持ちになった。しかしやっと断続して取れるようになっている師団司令部との無線連絡によって師団命令や情報をきくために終夜をついやし、追撃命令を下達したのは午前六時ちかかったのである。しかもこの間銃声が近距離におこり、銃弾がさかんに壁に命中してくるのであった。

満州の旧部下が苦辛して持ってきてくれたスルメや魚の干物を分配、そして久しぶりにクレーヴンの芳香に接した。この人達から東宮中佐が去る十一月十三日杭州湾上陸作戦の花とちったことをきいたのである。去る八月の中ごろ大連で別れたのが最後で、この人は満州移民の生みの親といわれもっと生きていてもらいたかった惜しい武人だった。万感胸に迫る。

焚火をかきたてて煤けた寝台に横になり忽ち熟睡。

午前八時頃ふと目をさませば至近の距離に激烈な銃声がしていて、通信手や行李の輜重兵特務兵までが銃を執ってばたばたやっている。

「何事だ！」

屋外を走りかけた副官にたずねる。
「今撃退したところです。紫金山から真っ黒になって降りてきました」
「敗残兵か？」
「チェックを腰だめで撃ってくるのです。それが何回も何回も五、六百いっしょになって」
「鉄砲をとりあげろ」
「降伏なんかするもんですか、皆殺しです」
くるわ、くるわあっちにもこっちにも実におびただしい敵兵である。彼らは紫金山頂にあった教導師の兵で血路を我支隊の間隙にもとめて戦線を逆に討ってでたものであった。銃声の間に怒号罵声すらきこえている。
家屋にたてこもっていつまでも抵抗するもの、いちはやく便衣にかえて逃走をはかるもの、そして三々五々降伏する者は必ず銃器を池の中に投じ、あるいは家の中に投げこんで放火していた、この点は実に徹底していた。当面の敵は蔣介石が虎の子のようにしていた師団だけあって最後までもっとも勇敢に戦ったようである。
以上は一局部の紛戦情況であるが、後に各部隊の報告を総合して夜半より午前十時ごろにいたる間の戦況をのべるならば、払暁前我第一線は敵陣地に突入しつづいて敵を急追し、軽装甲車中隊午前十時ごろ先ず下関に突進し、江岸に蝟集しあるいは江上を逃れる敗敵を掃射して無慮一万五千発の弾丸を撃ちつくした。この間歩三八は城北に面する五個の城門を占領して敵の退路をたち、連隊長は三三の大隊とともに装甲車に追及して西面浥江門付近に進出し、逃げおくれた敵と戦闘をまじえた。司令部は予備隊たる歩兵一中隊をもって左及び後方より突撃し来る前後数回の敵と激戦をまじえ、通信手、輜重兵、伝騎にいたるまで戦線に加入して敵を撃滅し、その後方を追及しつつ道路の不良に悩みつづけた野砲兵大隊はこれ又夜間敵の襲撃をうけ掩護の歩兵一中隊、工兵一中隊とともに零分画射撃をもって敵に応戦、四時間の久しきにわたって戦闘。更にその後方には後衛として残置した歩兵二中隊が夜半以後また二方面より反復殺到する敵の大部隊と戦闘してこれを撃滅した。更にその後方衛生隊付近に集成騎兵団が位置していたが、暗黒の裡に敵の襲撃をうけて部落内に突入せられ、人二百馬六十の損害をこうむるがごとき失態を演じている。この騎兵も又その後方にあった重砲もさかんに増援を請うてきたが自衛力

を有する者をかえりみるいとまはなかった、けだし予の部隊は数里の長きにわたって延伸し側面に対していたるところ激戦をまじえている状態だったからである。

午前十時ごろ、我左翼掩護のため高地上に位置せしめた中隊の陣地に対し後方から重砲の試射らしき数弾が飛来し、つづいて効力射にうつり、あれよあれよと兵隊がさわいでいるうちに三十余発の砲弾を集中した。山頂は爆煙におおわれてこの部隊の損害が目にみえるような気がした。血まよった我重砲が味方撃ちをやったのであるが、幸いに脊嚢一個ふっとばされたのみ。ちなみにこの中隊も山の上から敵の背後を攻撃している。

前述するごとく午前十時我支隊の軽装甲車が最初に下関に進出して完全に敵の背後を絶ちまた我歩兵は北面の城門全部を占領封鎖して敵を袋のねずみとし、少しおくれて第六師団の一部が南方より江岸に進出し、海軍第十一戦隊が溯江して流下する敵の舟筏を掃射しつつ午後二時下関に到着し、国崎支隊は午後四時対岸浦口に来着した。その他の城壁にむかった部隊は城内を掃蕩しつつある。実に理想的の包囲殲滅戦を演じているのであった。

この日我支隊の作戦地域内に遺棄された敵屍は一万数千にのぼりその外装甲車が江上に撃滅したもの並びに各部隊の俘虜を合算すれば我支隊のみにて二万以上の敵は解決されているはずである。

午後二時ごろ概して掃蕩をおわって背後を安全にし、部隊をまとめつつ前進和平門にいたる。

その後俘虜ぞくぞく投降し来り数千に達す、激昂せる兵は上官の制止をきかばこそ片はしより殺戮する。多数戦友の流血と十日間の辛惨をかえりみれば兵隊ならずとも「皆やってしまえ」といいたくなる。

白米はもはや一粒もなく、城内にはあるだろうが、俘虜に食わせるものの持ち合わせなんか我軍には無いはずだった。

和平門の城壁にのぼって大元帥陛下の万歳を三唱し奉る。この日天気快晴、金陵城頭いたるところ旭日旗のへんぽんたるを見てしぜんに眼頭があつくなった。

中央門外に宿営、美しき寝台あれど寝具なし、南京米をさがし出してくる。（今夜はゆっくり睡られるぞ）

南京攻略

ほのぼのと明け渡る空に金陵の
　城頭たかく旭旗はためく

江畔の殲滅戦

野に山にクリークにみつ敵の死屍
　皇軍は勝てりかちどきあがる

南京攻略の歌

何処までつづくクリークぞ
七日十日のそれならで
水をば渡る幾そたび

さもあらばあれつわものの
草むす屍はかねてより
水漬く屍もなんのその

悠久ここに四千年
千古に流るる長江の
畔に馬を進めつつ

夕べに抜くや紫金山
明孝陵はあのあたり
興亡誰か感無けん

夜はほのぼのと明け渡る
旭日浴びて金陵の
城頭高く日の御旗

海路遙けきひんがしの
みかどのいます日の本に
万歳の声響けかし
万歳の声ひびけかし

南京城頭にたってもっとも感激を深うしたる第一人者として予は自分自身を確認することができる、それは二ヵ年半のあいだ駐在した旧知の地であるがためばかりでない、また当時城内の三分の二が畑であり雉兎の類を猟しし古代の都が予が去って以後八年近代都市としてその

面目を一新している壮観に驚くがためでもない。実に予が若冠の明治四十四年以来満州問題解決を目標としてひそかに国民党に好意を表しつづけていた夢が、彼らの容共政策のため殊に蔣介石の英米依拠の政策によって日本との関係を絶って以来その夢が破れ、排日侮日のさなかにあってつぶさに不快をなめ、皇軍の前途をうれいて憤然ここを去った昭和四年夏の思い出がまざまざとよみがえるからであった。

「今にみよ」

これは私憤では断じてない、信義を裏切る者には後日かならず天譴を下さねばならぬ、これが爾来予のかたき信念となったのである。

紫金山の中腹にねむる孫文の霊は蔣介石らの短見にさぞかし口惜し涙をふるっているだろうと思う。近代的都市が一朝にしてスケレトンキャピタルに変じつつある、そしてその火が今えんえんとして各所におこり黒煙が天に沖しているのである。

「国亡びて山河あり」の感が深い。

南京城内外の掃蕩

十二月十四日、両連隊全部隷下に掌握、城内外の掃蕩を実施す。いたるところに潜伏している敗残兵をひきずり出す、が武器はほとんど全部放棄または隠匿していた。五百、千という大量の俘虜がぞくぞく連れられてくる、わりあいに悪びれてはいないがその何れを見ても疲れきっている、おそらく食うべき何一つの食料がなかったのであろう。

十二月十一日夜までは城外下関麟門まで電灯がともり水道が出ていた、情報によるとその日の軍事会議後守城司令官唐生智は江をわたって逃げている、そして多数の文武官吏及びその家族が多くは民船によって下流の方向に脱出したらしい。

例の橋本欣五郎大佐の重砲が外国船を射撃したとかしないとかいう問題は兵民をごった返しに満載して溯江した英国船（実は何かわかっものではない）であったと思われる。

城内にのこった住民はおそらく十万内外であろう。ほ

とんど細民ばかりである、しかしてその中に多数の敗残兵が混入していることは当然であると思われる。

金陵大学には一千以上の妙齢の婦女が収容せられ、外交部跡には敵の負傷兵数百が収容せられ外国人医師以下の庇護下にあって治外法権らしくふるまっていた。

守将が逃げた後にのこされた支那兵ほどみじめな存在はないのである、彼らに戦意の程がありや無しやは自明の理であるが、彼らにはもはや退路がなかったので死にもの狂いに抵抗したのである。

敗残兵といえども尚部落山間に潜伏して狙撃をつづけるものがいた、したがって抵抗するもの、従順の態度を失するものは容赦なく即座に殺戮した、終日各所に銃声がきこえた。

太平門外の大きな外壕が死骸でうずめられてゆく。

部屋のなかはほとんど掻きさがされかつ軍装品が散らばっていた、手榴弾や小銃弾はいたるところに投げすてられてある。くわうるに要所要所には地雷が埋設されてあるので危険この上もない。

城内の大通りはすべて陣内戦と防空を目的に大工事がほどこされ機関部をこわし或いは焼かれた自動車が列をなして棄てられ、その間に被服器材の分ちなく落花狼籍をきわめている。国民政府、軍官学校、その他の軍事施設は我空爆のために完膚なきまでにやっつけられている。城外飛行場また然り。

骸骨となった家屋の焼跡や、今なおさかんに火勢をあふっている各所の火災、住民は一人も顔をみせない、やせ犬だけが無表情に歩いたり寝そべったりしているのである。

下関のめぬきの通りはほとんど全部焼け落ちていた、バンドは数百の自動車が乗りすてられ、数百の死骸が一つ一つ岸から流れていく。

民国十六年二月、国民革命軍が南京に入城して以来まさに十年、当時城内の人口三十万から八十万に増加し、農民を搾取してここに見てくれがしの近代都市を建設することに成功した、だが今や槿花一朝の夢と化したこの破壊された首都の惨状をみて誰か感慨なからんやだ。

予が十年前に住んだ家は元裏に墓地があり周囲には近く一軒の家もなかった、二階の窓から雉を見つけて撃ったことも一度や二度ではなかったのであるが、それが家屋櫛比し樹木におおわれて捜しだすのに困難したほどで

ある。なつかしさのあまり屋内に入ってみたが于右任が住んでいたらしい、隣家はソ連大使館の堂々たる建物である。ちなみにこの大使館はその後焼失した、何か証拠煙滅のためではないかとの推測がおこなわれた。

午後海軍第十一戦隊の連絡将校関口大尉来る。

南京中央門外に舎営。

南京入城以後

十二月十五日、我第十六師団の入城式を挙行す、師団が将来城内の警備にあたるのだという者がある。おわって冷酒乾盃。

各師団その他種々雑多の各部隊がすでに入城していて、街頭は先にもいった如く兵隊であふれ、特務兵なんかにいかがわしき服装の者が多い、戦闘後軍紀風紀の頽敗を防ぐため指揮官がしっかりしないと憂うべき事故が頻発する。

城内において百万俵以上の南京米を押収する、この米のある間は後方から精米は補給しないという、いささか癪だがしかたがない、ちなみに南京米はぼろぼろで飯盒の中から箸ではすくえない。

十二月十六日、命により紫金山北側一帯の地域を掃蕩す、獲物少しとはいえ両連隊ともに数百の敗兵を引きずりだして処分した。

市民ぼつぼつ街上にあらわる。

十二月十七日、中支那方面軍の入城式を挙行せらる、部隊は中山門より向かって右に上海派遣軍、左に杭州湾上陸軍堵列、定刻方面軍司令官松井石根大将は朝香中将宮並びに柳川中将の両軍司令官以下、方面軍及び各軍幕僚をしたがえて馬上粛々と入城閲兵をおこない、嘲哮たる喇叭の吹奏裡に各部隊の敬礼を受く、旗竿ばかりになった古い部隊の連隊旗、旭日鮮やかな特設部隊の連隊旗、老兵壮兵をまじえて剣光帽影は折りからの快晴にはれがましき軍陣絵巻を展開した。

この盛観！　建国以来の首都を占領して晴れの入城式を挙行するはこれを以って嚆矢とするのではあるまいか、もっとも征韓の役はどうだったか知らないが近代化せる〇十万の貔貅が戦勝って滲としておごらず、ひたすら御稜威を奉体し不動の陣容を示したこの歴史的の盛観は前代未聞、躍進日本の表徴といわずして何ぞや。

赭顔鬚茫々の将兵が粛然としてこの晴れの盛儀に参列した記憶は永久不忘末代までの悟り草となるであろう。予は軍司令官の近接をまって部隊に敬礼を命じ、数歩馬を列中より乗りだして人員の報告をなす、（よくぞ男に生まれたる）感激のこの一瞬、予の身心が昇天して神の霊内にとけこむような衝動をおぼえた。

将官たる部隊長はちくじ扈従、国民政府にいたる。

将校以上は旧国民政府の中庭に集合、楼門上に大国旗を掲揚、軍楽隊の君が代奏楽裡に敬礼、全員かたずをのみ、眼頭が自然に熱くなる。

大元帥陛下の万歳を三唱し奉る。おわって方面軍司令官の挨拶、「大元帥陛下の御稜威によりまして我派遣軍は赫々の戦果をおさめここに……」

この時軍司令官のやせた頬にひとすじ糸を引いたのをみた、予は正面列中にいたので老大将の胸中の動きを明らかにその顔面神経に看取することができたのである、しかしこの涙あに軍司令官のみならんやである、誰かこの無限の感激に心を動かさぬ者があろう。

数十万の軍心は御稜威を脊に、皇国の興廃を双肩ににになって一致協力し今日の光栄を得たのである。

七万の鮮血が江南の田圃とクリークを彩っているのはいうまでもない。

冷酒乾盃、吾等の軍司令官宮殿下もこの日特に御機嫌うららかにあらせらるるのを見あげた。

十二月十八日、陸海軍合同慰霊祭を城内練兵場において執行。

この日雪もようの寒風ふきすさび、場をうずめた陸海の精鋭は、粛然として声なく今は亡き戦友の霊に対し敬虔なる黙禱を捧げるのであった。陸海両最高指揮官の祭文は惻々として将兵の肺腑にせまり、満場ただ寂々たるのみ。

われらの軍司令官殿下の参拝を合図に全軍敬礼、喇叭「国の鎮め」吹奏。

十二月二十一日、全軍の配宿を整理せられ各師団城内より退出、わが師団は南京城をふくむ周囲地域を警備。予は南京地区西部（城内を包含）警備司令官を命ぜられ、城内警備に関しては派遣軍司令官の直轄となる。

十二月二十二日、城内粛清委員長を命ぜられ、ただちに会議を開催す。

十二月二十三日、会議。

十二月二十四日、同右、査問工作開始。*

十二月二十六日、宣撫工作委員長命ぜらる、城内の粛清は土民にまじる敗兵を摘出して不穏分子の陰謀を封殺するにあるとともに我軍の軍紀風紀を粛清し民心を安んじすみやかに秩序と安寧を回復するにあった。予は俊烈なる統制と監察警防とによって概ね二十日間に所期の目的を達することができたのである。

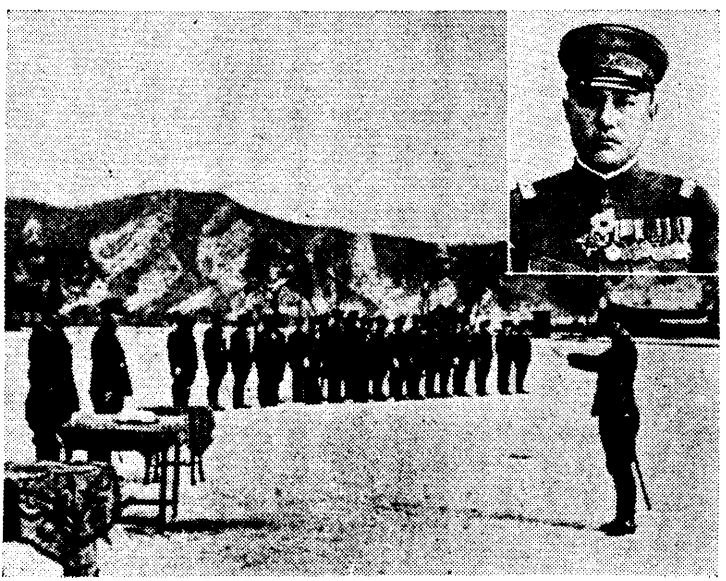
一月二日、敵機五機大校場飛行場を空襲、損害なし。

一月五日、査問会打切り、この日までに城内より摘出せし敗兵約二千、旧外交部に収容、外に宣教師の手中にありし支那傷病兵を俘虜として収容。

城外近郊にあって不逞行為をつづけつつある敗残兵も逐次捕縛、下関において処分せるもの数千に達す。

南京攻略戦における敵の損害は推定約七万にして、落城当日までに守備に任ぜし敵兵力は約十万と推算せらる。

一月二十二日、警備司令官の任を第十一師団の天谷少将と交代。その後ふたたび北支へ転進す。



吉林憲兵学校長当時と少将当時（右上）の著者。

用語解説

（本文＊印部分・五〇音順）

影佐機関 一九三九～四〇年（昭和十三～十四年）汪政権樹立工作のため設けられた機関（長・影佐禎昭）。

琿春事件 抗日不穏暴徒のため大正九年十月一日、在琿春の日本領事館が焼打ちされ、琿春県局子街、頭道溝、百草溝にあった三分館が危殆に瀕し、在留日本人の生命財産も危険に曝らされた事件。朝鮮軍司令官は第十九師団の兵力を出動させて、暴徒の討伐鎮圧にあたらせ、翌十年三月治安回復を認めて全兵力を引き揚げ、以後竜井村及び琿春に軍連絡班を常駐させた。

査問工作 宣撫工作に属する工作で、住民に対し調査尋問しながら宣撫の目的を達成するように工作することをいう。

三民主義 中国民主主義革命の初期における指導者孫文によって一九〇五年（明治三十八年）に提唱された、民族・民権・民生のことで、近代国家としての中国の建設のため、国内諸民族の平等と外国の圧迫からの独立（民族主義）、民主制の実現（民権主義）、平均地権・資本節制（民生主義）を眼目とし、これら三者の統一的実現を強調する政治理論である。

西安事件 一九三六年（昭和十一年）中国西安において、張学良の東北軍と揚虎城の西北軍が蔣介石を逮捕し監禁した事件。張は容共政策復活・対日宣戦・満州失地回復等を要求したが、宋子文や英国人ドナルド等の斡旋により妥協。本事件を契機に蔣介石は抗日民族統一戦線に踏み切った。

宣撫工作 戦時または事変に際し、占領地の住民に出兵の目的を理解させ、さらに進んでわが方に協力させるように工作することをいう。これがため各種の慰撫慰安手段、金品食糧、医薬、給与、施療等を実施して人心を把握しまた伝単配布、公演、映画、演劇等を行ない、目的を理解させる手段にした。

第一師管戦時警備 第一師団の戦時警備計画書にもとづく管内の警備をいう。二・二六事件の場合は第一師管戦時警備を下令せられ、兵力をもって管内の重要物件を警備し、あわせて一般治安の維持にあたった。

統帥部 統帥（高級指揮官が軍隊を指揮運用すること）業務にあずかる機関（司令部）を統帥機関または統帥部という。

南京政府 中華民国時代南京を首都とした政権。孫文・蔣介石・梁鴻志・汪兆銘（一九四〇～一九四五）の四時代があり、蔣介石時代がもっとも著名であるが、ここでは汪政権時代を指す。

ヤルタ協定 第二次世界大戦の末期、一九四五年（昭和二十年）米・英・ソ三国の首脳（ルーズベルト、チャーチル、スターリン）が二月四日より七日間クリミヤ半島ヤルタに会合し、戦争完遂、戦後処理、国際安全保障機関の創設に関する事項等につき定めた協定。

陸戦隊 戦地または事変地において、陸上に駐屯し陸上戦闘に従事した海軍の部隊をいう。

昭和戦争文学全集

昭和戦争文学全集　別巻　©
知られざる記録

昭和四十年十一月二十日印刷
昭和四十年十一月三十日発行

編者　昭和戦争文学全集編集委員会
発行者　陶山巖
印刷者　草刈親雄
発行所　株式会社集英社
東京都千代田区神田一ッ橋二ノ三
電話代表　東京(265)六一一一
振替　東京一五六五三
本文印刷　製本　中央精版印刷株式会社
ケース表紙印刷　共同印刷株式会社

定価　三九〇円
(落丁・乱丁本はお取りかえいたします)